

被爆者 阿部静子は語る

—悲しみに苦しみに 生きていてよかつた

阿部静子+「ヒロシマ通信」研究会



## 出版に当たり

このたび、私のことを本にしてくださいました。九七歳の消えかかる記憶を呼び覚まして出版してくださいました。ひとかたならぬお世話になりました。

思い返せば、若くして被爆して大切な顔に傷が残り、女性として人知れず苦しみました。原爆では、人々が百人百色の苦労をさせられて来ました。初歩的な原爆ですら、大変な悲しみを与えました。これがこの世の出来事かと思う地獄を見ました。

現在の強力な核兵器が使われたら、広島・長崎の比ではありません。ある外国の学者のシンミュレーションでは、東京の中心部に一発の核爆弾が投下されると、死者は推定約一一〇〇万人を超すそうです。広島の死者は昭和二〇（一九四五）年八月六日から年末までに約一四万人に上ったといわれています。これでもこれ

がこの世の出来事だろうかと思う惨状でして、一生苦しむ傷を受け、家族とともに悲しい一生を過ごさねばなりませんでした。

人間誰しも人さまの苦しい悲しい話は、心が痛み聞きたくないものです。ですが、私どもの体験が今繰り返されようとしている恐れが高まっています。原子爆弾に泣いた私が皆さまに声を大にして申し上げます。

決して決して今の世で核兵器を使用してはなりません。核兵器を持っているから安心安全ではありません。使用されれば人類は滅亡です。使つてならないものなら廃絶しかありません。原爆の被害に一生苦しんだ被爆者的心からの願いです。

阿  
部  
靜  
子

## 【凡例】

- ・阿部静子の証言は、二〇二四年五月一日から一〇月二日にかけて計一三回、阿部が暮らす「広島八景園」（広島市南区の介護付き有料老人ホーム）の自室で行われた。一〇月一七日に追加の聞き取りをした。――は編者の問い合わせを示す。
- ・阿部の「広島・長崎世界平和巡礼」に関する日記・書簡の引用は原文のままでしたが、適宜、句読点を補つた。「〈 〉」は引用での省略を示す。
- ・編者による注記は（ ）でくくつて本文に挿入した。証言に関連する人物や出来事の説明を別項で記し、広島平和記念資料館は本文中では一般に広く使われている原爆資料館とした。
- ・掲載写真は、クレジット明記がないものは阿部や家族の提供である。
- ・証言の関連事項を中心に「阿部静子略年譜」を付した。家族の没年は提供の記録や墓誌で確認し、享年は満年齢で記した。
- ・「あとがき」を付し、本書の作成に至る経緯などを記した。

表紙写真　・阿部静子　2024年8月6日　浜岡学撮影

## 〈目次〉

出版に当たり	3
はじめに	7
1 原爆被爆	9
2 悲しみに苦しみに	31
3 冷戦下の世界平和巡礼	75
4 被爆体験証言者	131
5 生きていてよかつた	157
阿部静子略年譜	178
あとがき	199

## はじめに

阿部静子は、今日に続く被爆者の訴えや活動の礎をつくった一人である。

一九四五年八月六日史上初の原爆にさらされ、米軍主導の日本占領統治が明けた五二年、いばらの道を強いられていた被爆者の集まりに参加し、体験記も表す。そして五六年、被爆者による初の「国会請願」から広島県原爆被害者団体協議会、続く日本原水爆被害者団体協議会の結成大会に参画する。

東西冷戦下の一九六四年には「広島・長崎世界平和巡礼団」として全米各地で自らの体験や思いを伝え、欧州や旧ソ連も回った。八〇年代からは被爆体験の証言活動を続け、修学旅行生のみならず各国元首や軍縮担当者らに核兵器廃絶、戦争のない世界を訴えた。

原爆が人間の頭上でさく裂した「ヒロシマ史」をまさに生き抜いてきた。被爆八〇年を控え、阿部の歩みをあらためてつぶさに尋ね、語っていただく。二〇二五年二月二二日に満九八歳を迎える。

# 1 原爆被爆



1943年12月ごろ、阿部三郎と静子の婚礼写真。新郎は25歳、新婦は16歳だった。夫の軍務復帰で新婚生活は約1週間にとどまり、再会は1945年末となつた。

一八歳だった。阿部静子は、広島市へ原爆を米軍が史上初めて投下した一九四五八年六日、さく裂直下の爆心地から南東約一・五キロで被爆する。前日の日曜晩に聞いた求めから市中心街近くに出でていた。

私は原爆の頃は、安芸郡中野村（広島市安芸区）の砂走に家を借りて、主人の母と二人で暮らしていました。実家がある奥海田村（安芸郡海田町）砂走との村境で、米や味噌などを扱う雑貨屋さんの離れでした。

阿部三郎と昭和一八（一九四三）年の暮れ頃に見合い結婚し、主人は一週間後に、満州牡丹江省（中国黒竜江省）に駐屯していた部隊（第八師団野砲兵第八連隊第九中隊）へ戻りました。九つ年上です。満州に春が来れば、お姑さん（三郎の母ナエ。一八九一年生まれ）と向こうへ渡るはずでしたが、戦況が悪くなり無理でした。姑さんは、もともとは天応町（現在は呉市）の出でしたが大阪で長

年暮らし、お花を教えていたそうです。戦争中ですから遊んではおられません。

私は海軍の工場（第一一海軍航空廠しょう）へ勤めに出ました。今の海田中学校がある所です。工場長は実家、大力の親戚だいりきの方でした。秘書のような仕事をして、空襲警報が発令されると、メガホンで工場中へ私が伝えておりました。

広島市の建物疎開作業へ出ることになったのは、あの頃こう呼んでいた「隣組・隣保班」との関係からです（政府内務省は一九四〇年、町内会の下位に「隣組」を組織化し、食糧などの配給切符を割り当て、組員同士の監視も促した）。

八月五日晚の常会で、班長さんが中野村役場の命令を受けて、「この砂走から建物疎開へ何人を出しなさい」と言われました。姑さんと女二人の世帯ですから（ガソリン不足で松の古株を掘つて炭焼き窯で乾留する）松根油を何貫目出せとか、馬の餌となる干し草を出せとかの命令も全然できていない。近所の方が私たちのでききない分まで補つて、「隣組」の務めを果たしてくださっていた。後ろめたく、小

さくなつて暮らしておりました。そこへ広島での建物疎開作業へ出動の話があり、私は奉公ができるならと手をすぐ挙げたわけです。

帰つて姑さんに、今日の常会はこうこうでしたと話したら、「うちは三郎を国へさきげとる。あんたがそんなことで行くことはない」ときっぱりと反対されました。しかし、申しましたように平素いろいろ申し訳ない気持ちでおりましたから、行かせてもらいました。勤めていた軍需工場へは前の晩、急に決めしたことなので連絡しようがなく無断欠勤でした。

翌六日は、早朝に山陽本線の安芸中野駅に集合しました。集落からは一番若い私を入れて五、六人だったでしようか、全体ではもつといました。私は半袖のブルーウスを着て、紺の生地でできたつりズボンをはき、自分で縫つた帽子をかぶつておりました。弁当は持つて出ましたが、水筒は忘れていましたね（中野村などが戦後合併して誕生した『瀬野川町史』）〔一九八〇年発行〕によると、村からは

七五人が出動した)。

あの頃の汽車は走つてもすごくゆっくり、午前七時前には安芸中野駅から乗つたと思います(国立国会図書館所蔵の一九四五年一月改正『時刻表』によると、広島駅までは遅延がなければ二三分かかっていた)。

広島駅に降りると、村役場の人が先導して南へ歩きました。言われるがまま着いた先が、平塚町(現在の中区東平塚町や西平塚町、鶴見町などの一帯)です。

女学校(西白島町の安田高等女学校)の頃は、安芸中野駅から広島市内へ列車通学していましたが、街中へはたまに福屋百貨店へ行くくらい。平塚町は全く来たことがない、知らない町でした。私どもの作業現場は、京橋川沿いの西側、鶴見橋の西詰め近くだったと思います。

壊す家屋の庭に木陰があり、弁当や防空頭巾などを収めた荷物袋をそこに置き、一緒に行つたお年寄りの方が見張りをして、作業を始めました。

私は若いから命じられて屋根に上がりました。命令には何でも聞かにやあいけん時代でしたからね。辺りには、大勢の男子・女子中学生がいましたが、交ざることはありません。中野村の人たちと組み、瓦を二枚ずつ重ねては下へ下へと渡していくんです。戦争ですから瓦も貴重な資材でした。

広島市の建物疎開は政府が前年一一月に指示し、一九四五年に入ると本格化する。第六次の疎開作業では、米軍の空襲に備える「避難広場・道路」を京橋川沿いに面する鶴見町や、市役所東側の雑魚場町、本川に接する中島町などに設けるため、各郡内からを含む国民義勇隊や学徒隊の大量投入が八月三日に始まり、義勇隊約三万人、学徒隊一万五〇〇〇人が動員される（一九八八年発行『広島県戦災誌』など）。

八月六日午前八時一五分、鶴見橋付近には、広島市内でいえば尾長町や荒神町

などから、郡部は安芸郡中野村や同坂村の国民義勇隊、県立広島一中三年生、広島女子商や広陵中の各一・二年生らの学徒隊が出ていた。

平屋の屋根に上がつていましたが、近づく飛行機（原爆投下 B 29 爆撃機「エノラ・ゲイ」や随行二機）のエンジン音も姿にも全く気づきませんでした。

ピカッと光つたのは覚えていません。気がついたら、屋根から吹き飛ばされ地面にたたきつけられて、やけどをしていました。周りは薄暗くなつていて、何か嫌な臭い、人間を焼く臭いが漂つておりました。それまで何分たつていたのかは分かりません。気を失っていたのだと思います。

やけどは右半身がひどい。原爆が爆発した方（爆心地の細工町II現中区大手町一丁目IIの上空、高度約六〇〇メートル）へ向かっていたんだだと思います。瓦を持っておりましたから手のひらも焼けていました。半袖のブラウスは右側が焼けてバラ

バラでした。黒に近い紺色のズボンは、足の生地部分はなくなつていて、右足もの皮膚は焼けていました。黒は熱を吸収するそうですが駄目です。ええ、右腕の皮膚も垂れ下がつていましたね。

腕時計なんか持つてはいません。気がついて何分かたつと、作業へ一緒に出了班長さんが捜しにきてくれた。幼い頃から知つていた縁のある方でした。三番目の兄と同級ですから九つ違い。私のことを「しーちゃん」と呼んでかわいがつてくれた。名前は乗末正志さんです。乗末さんは、どこからか一ぱくくらいの木切れを見つけてきて、「端を持ちなさい。こつちは私が持つから歩いて逃げよう」と言う。乗末さんもやけどをしていたが、ちょっと軽かつた。作業に出た私が大やけどを負つた。近所よしみの分、責任も強く感じられたんだと思います。

吹き飛ばされた場所から乗末さんに引つ張られるままに歩きました。鶴見橋を渡ったのか、（南側の）比治山橋を渡ったのか、はつきりとは覚えてはいません。

京橋川が見えると、やけどや怪我けがをしたたくさん的人が集まつておられた。川に飛び込んだり、次の爆撃機を避けるためか橋の欄干にぶら下がつていたりした人も見ました。体を冷やすため川に入つた人たちは、だんだん亡くなられたんじやないでしようか。

私はひたすら早く帰りたかつた。のろのろしていたと思いますが、休憩することもなしに歩いた。大やけどをした体で、昼間の暑いさなか、帽子もなしに歩くのは容易ではありません。軍需工場で配給を受けた、帆布で作つたような底がゴムの靴を履いて作業に出ていました。しかし、乗末さんと一緒に逃げるときには履いていなかつた。吹き飛ばされたときに脱げたのでしょうか。しかし搜す暇はない。命が惜しくて靴下だけで逃げ、歩き続けました。

顔が腫れて、目もよく見えなくなつていきました。道々で、家の下敷きになつた人々は逃げようとしても、梁や柱で手足が押さえられて動けない。「助けて！」

「助けて…」の声を耳にしましたが、どうしてあげることもできません。自分のことで精いっぱいででした。

どこをどう歩いて逃げたのか、道筋は覚えていません。ただ、道を、まだ舗装されていない道を無我夢中で歩いた。靴もないのに地面が熱いと思わないし、傷の痛みも逃げたいばかりであまり感じませんでした。今考えれば、あそこまで歩けたのは、木切れの棒で引っ張つてくださった乗末さんのおかげです。

皮膚をぶら下げて幽霊のようにぞろぞろ歩いていたら、やがて、メガホンからの声が聞こえた。「治療をしています」と叫んでいました。（爆心地から約六・二キロ、安芸郡船越町〔現安芸区船越南〕の）日本製鋼所の人でした。

近づくと、バケツに油を入れて刷毛<sup>はけ</sup>で、やけどの辺りに塗るだけの治療でした。傷を覆う包帯もガーゼもありません。それでも、ありがたかったです。普段は軍需工場には入れません。工場の人たちが自発的にやってくださったんだと思います。

私も油を塗つてもらつて、いつたん座つたら立ち上がりなかつたです。

広島市が一九七一年に発行した『広島原爆戦災誌』第三巻によると、高角砲や弾丸などを製造していた日本製鋼所広島製作所は、当日は電休日だったために従業員の多くが建物疎開作業に動員された一方、工場建物の被害は軽微だつた。押し寄せる負傷者に付属病院を開放して治療活動に当たつた。

工場にはひさしがずつと延びていて陰がありました。そこへ私が行つたときは、もう人がいっぱい。やけどをした人たちが体を横たえておられた。その中へちょっと自分が休める隙間を見つけて、横にならせてもらつた。水は逃げる途中も飲まなかつた。やけどをした人が水を飲んだら死ぬという噂うわさを聞いていましたので。乗末さんも油を塗つてもらいましたが、そこで離れ離れになりました。戦後もお

付き合いがあり、お子さんが大きくなられてもお元気でした。

横たわり目はつぶついても、学生さんのうわ言が聞こえてくる。「お父さん、お母ちゃん…」と言い、繰り返す声がだんだん小さくなる。死が迫っているのが分かる。私も親がいるのに、どうして来てくれないのかと正直恨みがましい気持ちにもなって横たわっておりました。

私には日にちの記憶はありませんが、家族がいうには原爆の三日後です。

「静子、静子！」と私の名を叫ぶ声がして、父の大力万吉（一八八〇年生まれ、当時六五歳）が来てくれました。声がする方向にちょっととはい出ると、父は「あんたが静子か？」と何度も尋ねました。大やけどをして顔はカボチャのように腫れていますし、自分の娘だとは信じられない様子でした。父から後に聞いた話では、比治山など負傷者が集まっている所を捜したけれど見つからない。日本製鋼所にもたくさんいるようなので立ち寄ったそうです。

それまでの間、食べる物は、むすびのようなものが配られましたが、口もやけどをしているので、いただいていません。父は私を見つけると、奥海田村の精米所からリヤカーを借りてきました。一トメ四角くらいの寸法でした。体が落ちないように「く」の字になつていたように思います。振動でガタガタ揺れ、泣くほど体が痛かったのをはつきりと覚えています。

私の実家はその時分、嫁いだ姉一人が呉空襲で子どもらと戻っていました。一番上の姉サダヨは二人の子とお姑さんを連れて座敷を、四番目の子を身ごもつていた次の姉ミサコは納屋の二階を子どもらと使っていました。両親は、私を休ませる場所がないのでやむを得ず、姑さんと暮らしていた中野村の借家へ運びました。母のツ子（一八八二年生まれ、当時六二歳）や姉たちが通つて治療をしてくれました。と申しても、やけどにはジャガイモをすつて塗るのがいいと聞いての治療です。お医者さんもいません。一升瓶半分の食用油やガーゼを手にするのも

大変でした。

やけどに張ったジャガハイモが乾燥してガーゼを取る時、私が「痛い、痛い」つて泣くもんですから、父が「こんなに痛がとつたら助からん」と口にしたそうです。姉たちは「生きとるのに治療はやめられない」と言つて続けてくれました。

後から聞いた話では、私は床に就いていた時に「海ゆかば」（信時潔作曲。大本営発表を報じるラジオ放送の冒頭に流されて国民に広く知られた歌曲）を無意識のうちに大声で歌いもした。帰ってきて一〇日くらい後、やはり広島へ出た、私が借りていた家の隣の男性が亡くなられたことを家族は伏せていました。八月一五日の「玉音放送」を聞いたかどうかも覚えていません。

何とか起き上がるようになつたのは、（九月一七日襲来の）枕崎台風の頃。変な雨風となり、一階の畳が浮いてきて、姑さんと二人ではうように二階へ上がりました。広島から一緒に逃げた乗末さんの弟さんが向かいに住んでおられ、私

をおぶつてね、自分ちの蔵二階に泊めてくださいました。田植えを一緒にすること  
縁でした。私の実家も床が漬かりました。大変な台風でした（広島県沿岸部を中  
心に死者は二〇一二人に上った）。

秋も深まつた頃、鏡の前へはつて自分の顔を見ました。顔じゅうが赤色となり、  
口はゆがみ、目は引きつっていた。これが私か…、あまりにも醜い姿に、あの時  
ひと思いに死んでいれば、なぜ死ねなかつたのだろうかとまで思いました。それ  
は泣きました。姑さんは膾うみの付いた浴衣は瀬野川で洗つてくれていましたが、「私  
が反対したのに広島へ行くからだ」と建物疎開作業に出たことを責められました。  
都會暮らしが長かつたせいか、ご近所とのつながりとかを気にされない人でした。  
それまで音沙汰がなかつた主人が私の実家を目指して帰つてきたのはその年の  
一二月三〇日です。私には大事件でしたから日付ははつきり覚えていています。知ら  
せを聞いて、姑さんと実家へ駆け付けました。満州からエンダービーというはる

か南方の島に送られての復員でした。

大やけどの包帯をしていた私が着く前に、父も母も手を突いて、主人にこうお願いしたそうです。「娘をもらつていただいたが、原子爆弾で、醜い姿になりました。どうぞ、ここで別れてやつてください」。しかし、主人はみんなの前で言いました。「自分が戦地で手足を失つたとしても、生きて帰つて妻に面倒をみてもらおう。それが心の支えだつた。妻が傷ついたからといって離婚はできない」。はつきりと申しました。

話し合いがひとまず終わると、姑さんは「静子さんはここへ泊めてもらいなさい」とおっしゃいました。すると、主人は「できません。帰つてらつしやい」と言い、一緒に戻りました。うれしかつたです。おかげで主人が亡くなるまで連れ添わしてくれました（阿部三郎は一九九二年に七三歳で死去する）。

その頃には、やけどの痕にケロイドができていました。右手の指は自由に動か

すことができなくなり、口の周りのケロイドでものを食べるとこぼれ落ちる。原爆の影響がどうなるかは分からぬ。外に出れば、「赤鬼が歩いている」と心ない人が平氣で言う。うちにいても、姑さんがことあるたび実家へ帰そうとされました。主人には申し訳なく思いましたが、うつむいて人と会わないように、傷が見られないように隠れて暮らす毎日でした。



原爆で廃墟の広島デルタ中心部を南東に向かって見る。奥の京橋川の左側に架かるのが鶴見橋、その手前が阿部が建物疊開作業中に被爆した旧平塚町の一帯。

(1945年11月、米戦略爆撃調査団写真班員H. J. ピーターソン撮影、原爆資料館提供)



比治山上空から西に捉えた広島デルタの廃墟。京橋川に架かる右が鶴見橋、左が比治山橋。

(1945年11月、H. J. ピーターソン撮影、原爆資料館提供)



(現在の地図の上に関連地名・名称を落とした)

地図 1 阿部静子関連広島地名略図





# 2

悲しみに  
苦しみに



1956年8月10日、日本被団協の結成大会の会場となった長崎国際文化会館の前で。前列左から池田精子さん、阿部、村戸由子さん。後列中央が吉川清さん、同右が川手健さん。

(吉川生美さん提供の「吉川清資料」から)

一九四五年一二月に復員し、原爆で心身に深い傷を背負った妻を受け止めた夫、

阿部三郎さんとのなれ初めを、あらためて教えてください。

阿部 こちらこそよろしくお願ひします。主人の阿部三郎は山形県で大正七（一九一八）年に生まれ、大阪で大きくなりました。天王寺中（天王寺高）を出て外国语大学（当時は大阪外国語学校、現在の大坂大）へ進みましたが、卒業の前に召集となつたそうです。陸軍予備士官学校で学んで、私がお見合いをした時は将校さん、中尉でした。満州（中国東北部）へ派遣されていた主人は「嫁取り」のために一時帰国して、親戚が矢野町（現在は広島市安芸区）におられたのでありますに訪ねたんです。私の実家がある奥海田村（安芸郡海田町）砂走で先隣に住んでいた方がその話を聞きつけて、段取りをしてくださいました。昭和一八（一九四三）年の終わり頃と記憶しています。呉市にいた一番目の姉が婚礼着を快く貸してくれて、矢野町の写真館で婚礼写真を撮りました。配給のお酒で三三九度

をしたくらいでしたね。

一満年齢でいえば一六歳、既に働いておられたのですか。

阿部 その年、女学校（現在の安田女子高）を出て（広島市国泰寺町にあった）「土井田高等洋裁女学校」へ通っていました。旧姓は大力といい、兄が三人、姉四人の五女で八人きょうだいの末っ子です。四女は幼い頃に亡くなりました。

主人は、薪の荷下ろしを長兄の要かなめとしている私の姿をひそかに見て気に入つたらしい。私は女学校の時分から将校さんに漠然と憧れていきました。広島市内の映画館へ一緒に参りましたが、題名も劇場名も覚えていません。幼かつたですよね。

それ以上に、父の万吉（一八八〇年生まれ）がのぼせ上がつて、よい返事をして結婚となりました。

一週間後でしたか、主人が部隊（第八師団野砲兵第八連隊第九中隊）へ戻るの

を広島駅で見送りました。厳寒の満州が暖かくなれば、お姑さん（三郎の母ナエ、一八九一年生まれ）と向こうへ渡るはずでしたが、戦争が激しくなり、諦めました。はがき（軍事郵便）でどこそこにいるということをカナ暗号で知らせてくれたらしいのですが、読み解けませんよね。満州牡丹江省（中国黒竜江省）からはあるか南方のエンダービーという島へ送られたのを知ったのは、こちらへ帰つてきて。主人も原爆で私がどうなったのかは全く知りませんでした。

阿部三郎が中隊長だった『鬪志とともに 第一〇二部隊第九中隊史』（一九八一年発行）によると、一九四四年一月に南方派遣の命を受け、西太平洋サイパン島を経て三月、力口リン諸島エンダービー島に上陸。米軍のサイパン占領で食糧の補給は途絶し「ねすみ鼠・トカゲ等も見ないまでに食べ尽くした」。トラック島から四年一二月二六日、米軍の戦車揚陸艦で神奈川県横須賀港へ戻った。

—被爆後の生活は、三郎さんと義母ナエさんとの三人で始まったわけですが、暮らし向きはどのようなものだったのでしょうか。

**阿部** 主人は将校だったので（除隊時は大尉）、公職追放（連合国軍総司令部 HQ）が一九四六年一月政府に指令）にひっかかり、私の実家、大力の親戚の木屋さんが広島市内におつたので、手伝わせてもらつて何とか暮らしを立てました。お姑さんは、私を実家へ帰して慣れ親しんだ大阪へ一人息子と帰りたがりました。主人は実は姑さんに小さい頃に引き取られて育ててもらつたんです。恩義がありました。しかし、私を決して離縁しようとしたくなかった。どちらの肩も持てず苦しい立場でした。

顔や手に醜い原爆のケロイドや障害がある女房を持つて一生過ごそうと思つたら、よほどの忍耐力がないと暮らせんと思います。詳しく話そうとしませんでしたが、主人は赤痢や栄養失調にも襲われた島で大変な目に遭つていきました。私を

呼ぶ時は常に「静子さん」と、最期まで呼び捨てにしない人でした。

—ケロイドの治療は受けられたのでしょうか。

阿部　はい、妊娠をしたからです。子どものおむつなどの洗濯が大変ですからね。

たらいで手洗いして絞る時代です。この右手の指が少しでも動かせるように両親が治療を受けさせてくれました。宇品町（南区）の県立病院（当時は日本医療団宇品病院）に半年間入院しました。指を前に曲げられるよう手の甲におなかの皮膚を植皮してもらって、何とか使えるようになりました。麻酔も医薬品も不自由な頃なので手術は本当に痛い。医師は元軍医さんばかりでしたが、成果が思うように上がらず打ち切りました。

ちょうど預金封鎖（政府は超インフレ阻止のため一九四六年二月、五円以上を強制的に金融機関に預け入れさせて既存の預金とともに封鎖）があつたので治療

費を出してくれた父の万吉や母ツ子は大変でした。入院中、主人には黙つて、出産するかどうか胸のうちを産婦人科の先生に相談したことがあります。なにせ針のむしろでしたから。主人が離婚してくれたらどんなに楽だろうか、と思つていました。

—離婚したいと夫の三郎さんに話されたことは？

阿部　ございません。両親は「別れてやつてください」と何度もお願いしましたけれど。そのたび、主人は「それはできません」と意思は固かつた。しつかりした人でした。私もちよつと惹かれ<sup>ひ</sup>たる点もございましたから、ずるずると暮らしていたと思います。

—土足で立ち入るような質問を重ねてすいません。

阿部 この年まで生かさせてもらつてているのは、私のような者を通じて原爆の恐ろしさ、慘めさ、平和の尊さを若い人たちにも知つていただきくためですから。どうぞ、遠慮せずに聞いてください。

—「針のむしろ」と、そこまで追い詰められたのは何があつたのですか。

阿部 姑さんは原爆に遭つた者は、「うちの嫁にふさわしくないので帰つてもらいましよう」と言い、帰そうとされました。<sup>ちまた</sup>主人が復員しても入籍に反対されました。被爆した人は短命であるという巷のうわさもありましたから。主人の意思が固かつたから一緒におれたんですけれど。入籍は長男が誕生してからでした。しかし、「この子は私が育てるから帰つてください」と私に向かつて、それはもうはつきりと言われました。何回も。夫の前でも言わされました。夫が「そういうことはできん」と言うので、「三郎は戦争から帰つてばかになつた」「こんとになつた

ものを、まだ女房に置き続ける」と大変な攻撃でした。大力の父も母も「帰つて  
こい。帰つたら、お前に向いた風も吹くから」と言いました。夫は私を味方して  
くれましたが、お姑さんとの日々は苦労続きでした。お産が近づいても、おむつ  
の一枚も、産着も用意はしてくださいませんでした。

—夫婦だけで暮らそうとはならなかつたのですか。

阿部　あの頃は、子どもが親を見るのは当たり前、そんなことを考える経済的な  
余裕もありません。（長兄）要の友人の家を借りて住んでいた時、そこで長男を産  
みました。今の自衛隊海田市駐屯地（海田町）の辺りだつたと思ひますが、日本  
軍の倉庫やなんやらを進駐軍が解体した材木が残つており、通訳をしていた要が  
私のために入手してくれました。要は米国へ移民し、向こうで生まれた長男を実  
家の両親に見せるため戻つたところ（日米）開戦となり帰ることができなかつた。

真珠湾攻撃をラジオで聞いて「勝ちやあせんよ、日本は」と言いりました。米国の豊かな暮らしをね、自分が見ておりますから。

その材木で私の長男が一つになつた頃、奥海田村で少し高い場所を借りて家を建てました。（一九四五年九月の枕崎台風による）水害に懲りていきましたので。主人は材木屋さんで力仕事もして私どもの暮らしを支えてくれました。（一九四九年に）次男も生まれました。荷の上げ下ろしから腰を痛めて仕事ができなくなるところでしたが、（一九五二年の）講和条約発効で公職追放がなくなつて県の職員採用試験を受けることができ、幸い合格となりました。

—その頃ですよね。阿部さんが山代巴さんの求めから手記を書いて送つたのは、『原爆に生きて』（一九五三年発行）に匿名で収録された「友の手紙」と題した一節を読みます。

「近頃は毎日山へ行つております。田舎で暮らしておりますと、一年中の薪を此の寒い時に取つて置くのです。山へ行くのが一番苦しい仕事です。私は右手が不由な為、木を切るのに力が入りませんのです。そして負うと血行が悪くなりますので、ケロイドの手が痛かゆくて困ります。けれども働くことがただ一つのとり柄とされている私は、がむしやらに働くのです。貴女の御都合のよろしい時、場所を前もって御指定下されば、自分の時間とてあまり持てませんが、何とかして参りたいと思います。くれぐれも御自身御自愛専一の程ほど祈り申し上げます。かしこえり子より」

——この「えり子」というのは阿部さんではないですか。

阿部　ええ、そうです。自分の心境を誰かに聞いてほしいという気持ちがあり、

山代さんに促されて書きましたが、本が郵送で届くと風呂釜ですぐ焼きました。

お姑さんに見られてはいけんと思つたからです。ですから、主人にも本を見せていません。山代さんが訪ねて来られても、私はたいがい山や畠に出ていて留守でした。姑さんが出られるので、の方は遠慮されて来られなくなり、手紙でやりとりしたのが、あの手記です。送り主の「えり子」という名は山代さんが気をつかつて付けてくださいました。匿名ですから周りにも気づかれていません。ええ、私が書いた手記で間違ひありません。この夏久しぶりに自分の手記を読み返しましたが、（収録に際して）脚色はなかつたですね。

『原爆に生きて』は、作家の山代巴や、一九五二年八月一〇日に結成された「原爆被害者の会」事務局長を担つた川手健ら五人が編さんした。山代の「序」によると翌日、「我々が被害者の家を直接訪問してお願いし」て集めることを相談。そ

の結果、二七編を収録する。原爆で心身をえぐられた被害者への国の援護が全くなく、社会の関心も薄かった、今は「空白の一〇年」ともいわれる時代の被爆者の赤裸々な声が刻まれる。島本正次郎や温品道義、日詰忍ら五六結成の広島県原爆被害者団体協議会の礎をつくった人たちも手記を寄せている。

「えり子」名による阿部静子の手記後半をルビも原文のまま引く。

「その秋、風波のたえない我が家に長男が生まれた。姑は毎日枕元でいやみを並べる。不自由な体の初産故、人一倍弱って三十三日の宮参りに起きるのがやつと。長男は産れ落ちると（き）から弱く、医者ばかりにかかつておりました。姑は、

『どうせあんな親の子だから』

とか、

『同じ頃に産まれた近所の赤ちゃんは元気だ。一度だつて医者へかかるない』とか、私にあてつけ、家の前では近所の人々と長男の弱いことを、私にきこえ（よ）がしに話されます。

長男の弱い事は何も原爆の為でなく、私が元気な母であつても、偶然に出来た事かもわからないのに、すぐ私の被爆のことに結びつけ、角を立てて、一生の不作と嘆かれると、私は穴でも掘つて入りたい気がいたします。

宮参りには里へ行くものだと言われ、三十日を待ちかねて、長男をおんぶして追われるよう里方へ参りました。途中やくざ風の若者三人、私を見て、

『おい、あんな（彼女）でも子を生んだんで』

と大きな声で話し合い、からからと笑いました。其の時の私の気持ちをおさつし下さい。人通りの少ない道を選んで、人と会うことを避けて、悲しい心で歩く私は人に見られるだけでも悲しいのに、涙が出て出て泣き泣き土手を歩いたもの

です。子供に会えば、

『乞食ほいとが通る』

と言うし、私はこんな母のもとに育つ長男の将来を考え、暗い気持ちになりました。

人相が悪くなつただけで、内容までかわつたわけでもないのに、外見で一切を決めてしまうなんて、なんとあさはかなことかと思うけれど、大ていの人は外見を見て、二段も三段も下目に見られる。私は日に日に自分というものの自信を失い、物言わぬうつむいた人間になつてしまふのだった。

世の中も段々と平和になり、豊かになり、美しくなるのに、私は終生なおらぬ身の傷を思い、世の人々からとり残されたような寂しさで一ぱいです。子供を連れ夫婦揃つて遊びにお出かけになる人々を見るにつけ、自分の身の一段とわびしく、父母と共に遊びに出る楽しさを知らない子供がいとおしい。一生日陰者の存

在に甘んじなければならない自分を、鏡の中でつくづく眺め、まるで悪夢でも見てる様で、信じられない氣がする事がしばしばです。でもやっぱり私は本当に不具な体になつていています。一生こんな悲しい心で暮らさねばなりません。それも年々悲しみが、こくなつて来るような感じがします。

三ヶ月に一度も広島へ出るような事もないのに、勤労作業に動員されたばかりに、そして私があまりに正直者で愛国者であった為に、こんな運命の人間となりました。

私は今自分の無力を嘆く。けれど、出来るだけ力になりたいと願っています。  
そしてこの真実の訴えに感じられる人々に、原爆被害者の力になつていただきたいと思います」

—そもそも山代さんは、阿部さんのことなどをどのように知ったのでしょうか。



1952年の「原爆被害者の会」発足で阿部も訪れるようになった「原爆一号の店」。吉川清さんが広島赤十字病院を退院した51年原爆ドームそばにバラック建ての土産物店を開き、会の事務所も置いた。(吉川生美さん提供の「吉川清資料」から)

阿部 吉川さんのおうちで会つたと記憶しています。山代さんも来られていて「手記を書いてください」と集まっていた皆さんに言われたんです。私は書けませんと何度も断わったんですが、やはり誰かに聞いてほしいという気持ちがありました。

—「原爆被害者の会」を呼びかけて幹事を務めた吉川清さんですね。そういえば、吉川

さんの著書『「原爆一号」といわれて』（一九八一年発行）には、阿部さんとは「一九五二年から親類づきあいをしていました」とあります。どのような出会いだったのでしょうか。

阿部　日にちは覚えていませんが、その頃の夏だと思います。私の母と長男との三人で広島市内へ出かけ、打ち上げ花火を相生橋からだつたと思いますが、そこから見ました（一九五二年八月九、一〇の両日、「ひろしま川祭り」が原爆ドームそばを流れる元安川の河岸で開かれた）。帰り道、ドームそばにあつた土産物店（看板は「原爆一号の店」）に、「原爆被害者の方は声をかけてください」と書いてある案内を見て入り、吉川さんや（妻の）生美さんと初めてお会いしました。吉川さんが「原爆一号」と呼ばれていることや、活動も存じませんでした。話してみると、異常な親しみが私にきました。

米国の代表的な写真誌『ライフ』が一九四七年九月一日号で「平和都市」広島特集を組み、広島赤十字病院に入院していた吉川清が上半身裸となつたケロイドの姿を一ページごと当てて掲載。その扱いや反響から「原爆一号」の呼称が国内の新聞・ラジオを通じて広がつた。吉川は一九八六年に七四歳で死去。

阿部 吉川さんとの出会いからお店（兼自宅）を訪ねては、原爆に苦しむ人たちと話し合うようになつたんです。気持ちのやり場がなく、あそこへ行けば、いろんな仲間が集まつておられて心が和むんですよ。背中にやけどをしたご婦人は銭湯で他のお客さんに気持ち悪がられ、番台の人から来ないようになつて言われた。そういう婦人が見えると、吉川さんはバラックに付けていた、お風呂を沸かしてね。優しくなさつていきました。

私が家にいなきやあ、姑さんはうれしい。子どもが幼かつたので必ず一人は連

れて、下の子の時はおんぶもして訪ねました。少しずつ心の傷が癒えるんです。夜遅くなつて山陽本線の終電が出てしまつて呉線の終電に乗り、海田市の駅から歩いて帰つたこともあります。会合（「原爆被害者の会」や一九五五年にできた「八・六友の会」）に参加すると、私は自覚していませんでしたが、少し元気になつて帰つていたんです。今思うと私の胸もね、さっぱりしておりました。姑さんは黙認していたのだと思います。吉川さん夫妻はお子さんがいないので私の三人の子どもをかわいがつてくださるから、主人も親しくなりました。次男が（一九七六年に）結婚する時にはご夫妻が仲人をしてくださいました。

GHQの占領統治が明けた一九五二年は、「原爆被害の初公開」とうたつた写真雑誌『アサヒグラフ』八月六日号が計七〇万部を売り上げ、新藤兼人監督が広島で初めて口ヶをした『原爆の子』が公開されるなど原爆への関心が広がる。



1955年8月6日、平和記念公園に完成した広島市公会堂で開かれた第1回原水爆禁止世界大会に長女（手前）を抱いて参加した阿部と、河本時恵さん（前列左）。

（『原水爆禁止運動資料集』第2巻）

吉川らによる「原爆被害者の会」は、広島市民病院での無料診断の実施などを求め、原爆の禁止に向けて「被害者の団結と組織的な平和運動」を唱えた（『原爆に生きて』収録の川手健「半年の足跡」）。阿部は匿名手記で「私の村の負傷者に四（）五名お話しして、被害者の会への入会を勧めております」と書いていた。

—「原爆被害者の会」の集まりに参加し入会も促すとなると、近隣の人たちから  
例えば「アカ」とみられるような恐れを抱かれたり、夫の三郎さんから何か言  
われたりすることはなかつたのでしょうか。

阿部 小さな運動でしたから、あの頃の原爆の運動は。私はうつむいて傷が見え  
ないよう暮らしておりました。人さまに目立つようなことはなかつた。仲間た  
ちによつて自分が慰められ、元気をもらう。そういう会でした。私が明るく元氣  
になることを主人も喜びました。行くなと言つたことはありません。

一同世代でみても、女性が外で活動することが珍しかつた頃に、お姑さんとも一  
緒に暮らしておられた市井の主婦が、なぜ被爆者の集まりに参加するようにな  
り、一九五六年三月に上京して初の「国会請願」までに至つたのでしょうか。

阿部 私の心がたまらなかつたわけです。慰めてほしいのに、生傷に塩をつける



1956年広島からの原爆被害者国会請願メンバー。日本被団協初代事務局長となる、藤居平一さん（中央）を囲むように、前列左から3人目が広島県被団協理事となる島本正次郎さん、右へ阿部の次男、阿部。後列左端に「原爆の子の像」（1958年除幕）の建設を呼びかけた河本一郎さんも写る。

ようにも知らない人からもいじめられるんですねよね。「赤鬼が歩いとる」と。それがたまらん。私も爆発というか、そういうチャンスがあるなら行かしていいだこう、勇気を持つて行きました。近くに住んでおられた桧垣先生が熱心に何回も私の家に来られて、（初の「国会請願」へ）「一緒に行つてください」と頼まれました。それを姑のナエさんも聞かれて、「桧垣先生が言われるんだ

から、行かしてもらいたいなさいよ」とだんだんになつたという感じです。仕方がなかつたのだと思います。夫は意思が固いし、私はしぶといし。吉川さんや桧垣先生、お付き合いをする方々から元気をいただいて帰るのが効いたんでしよう。

桧垣益人は一九四五年八月六日、広島県海田地方事務所に出勤途上の広島駅地下道で被爆した。自宅は当時、大手町（中区）にあり妻や五女は死去。五六七年七月に結成した安芸郡原爆被害者団体連合会や、海田町原爆被害者会の会長を務めるなど広島県原爆被害者団体協議会の組織化に尽力し、同事務局長を六一年から二三年間にわたって担つた。九〇年に九四歳で死去。

「国会請願」で上京する前日、原爆被害者広島県大会が一九五六年三月一八日、約三〇〇人が参加して千田小学校講堂（中区）で開かれました。「原・水爆実験

より原爆症の治療法を確立することが第一だ」との宣言をして、請願への代表団を激励したとあります（中国新聞一九五六年三月一九日付）。

阿部 大会には誘われて参加しましたが、私はあいさつとかはしていません。「国會請願」に加わったのは桧垣先生が家に何回も来られて姑さんを説得されたからです。ただ、子ども三人（一九五四年に長女が誕生）の面倒は見切れんと言われる所以で、次男（当時六つ）を連れていくことにしました。嫁に行くとき持つてきた着物を出して着て、急行「安芸」に乗り東京へ向かつたわけです（広島駅を一九日午後二時半に出発し、東京駅へは二〇日午前九時五分に着いた）。

米軍の水爆実験により中部太平洋でマグロ漁船第五福竜丸の乗組員二三人が「死の灰」を浴びた一九五四年の「ビキニ被災」を機に五五年八月六日、初の原水爆禁止世界大会が広島市で開かれ、翌九月には原水爆禁止日本協議会が発足し

ていた。

一九五六年三月二〇日の原爆被災者らによる初の「国会請願」は日本原水協が呼びかけた。『原水爆禁止ニユース』第六号（五六六年四月一日発行）によると、広島・長崎の「原爆被災者請願団」は四一人（うち女性一七人）。青森、長野などの代表約一〇人と手分けして衆参両院議長に面会し、「太平洋の水爆実験禁止」「原爆被災者の治療費国庫負担」などを訴える。

一 東京駅に着いた記録映像や写真を見るとカメラは、「原爆被災者」のたすきをかけて、ケロイドが目立つ人たち、わけても若い女性を捉えています。阿部さんは当時二九歳です。

阿部 広島からの代表で行くからには、写真を撮られるのもやむを得ないと思つていきましたけれど、いい気はしませんでした。顔のやけどの痕が真っ赤でしたか

らね。我慢したのでしよう。しようがないですね。今でもライトを当てられると、顔のデコボコが一層目立つ。新聞・テレビに載つたものを見たら、さめざめと泣くみたいな気持ちになります。しかし、原爆の傷を受けた証人として一生生きていかなければならないという勇気も生まれてきたのでした。苦しさ、悲しさの中からであり、皆さんと行動する中で生まれたんだろうなと思います。

—翌二一日には二〇人で首相の鳩山一郎邸（東京都文京区音羽）に薰夫人を訪ねた様子が記事になっています。見出しへ「鳩山夫人に涙の訴え 原爆被害者婦人代表ら」、本文は阿部さんが代表して願いを述べたとあります（中国新聞一九五六年三月二二日付）。

**阿部** 鳩山夫人には「主人に皆さんることはお伝えします」と言つていただきました。この記事には「一粒種の手を引いて」とありますが、連れて行つたのは次

男です。薰さんは優しく、次男がカステラをよばれた写真があります。

鳩山邸へ行く前には、池田勇人さん（竹原市出身、当時は元大蔵大臣。六〇一六四年首相）を自宅に訪ねたんです（自宅は新宿区信濃町にあつた）。池田さんは、私たちの苦しい生活心情を聞いて涙ぐまれた。最後に「日本はアメリカに弱いからねえ」とつぶやくように言われま



1956年3月21日、鳩山一郎首相の私邸を訪れて薰夫人（手前左端）に広島からの女性陣を代表してあいさつする阿部（右から3人目）。次男を連れて上京した。右隣は村戸由子さん。

した。アメリカには強いことが言えないから、われわれが一〇年も辛酸をなめたのではと思いました。被爆者は体は弱いし、風邪はひきやすいし、差別に遭い、恥ずかしいし、家庭もゴタゴタする。本当につらい時代でした。池田さんの言葉を聞いて、情けなき、運動の前途の多難さも胸いっぱい感じました。

—今も記憶するのは、立ち上がったけれど…の気持ちの方が強かつたということでしょうか。

阿部 放つておかげで、たまたまんじやない、と思いました。国会請願へ行つても、いいお返事はなかつたし、心に感じたことを帰りの列車（請願・訪問を終えた足で東京駅を午後九時三〇分出発）の中で書いたのが、あの歌、「悲しみに苦しみに」です。

悲しみに苦しみに

笑いを遠く忘れた

被災者の上に

午前十時の陽射しのような

暖かい手を

生きていてよかつたと

思いつづけられるように

詩の心得は女学校の時分からありません。急にふと浮かんだんです。私の心の叫びをノートの切れ端に書いて、向かい合わせの席に座つておられた藤居先生に「今こういう心境なんです」と一番に見ていただきました。先生は広島へ戻ると、新聞社の方々に話のタネにしてくださいたらしく、曲も付けられて広がっていき

ました。「国会請願」に参加して初めて藤居先生を間近に拝見し、あの歌をお見せしたのがきっかけとなり、私をかわいがつてくださり、子どもの成長にも心を寄せてくださいました。次男は先生と同じ早稲田大へ進みました。同窓会の記念大会に先生が広島の「稻門会」代表として行かれる際には、社会人となっていた次男を誘っていただきました。

原爆で父や妹を失った藤居平一は、家業の銘木店を営み、広島市民生委員の活動から原爆被害者の窮状を受け止めて「まどうてくれ」と被爆者への国家補償をいち早く唱えた。「国会請願」に続く一九五六年五月二七日、広島県被団協を設立して代表委員に就く。八月一〇日、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の結成で初代事務局長も担い、代表委員の一人となつた森滝市郎（当時、広島大教授）とともに被爆者運動の礎をつくり率いる。九六年に八〇歳で死去。



1956年5月27日、広島県被団協の結成総会が広島市基町のY  
M C A 講堂で開かれた。立ってあいさつしているのが代表委  
員に就く藤居平一さん。

(中国新聞撮影・提供)

—初の「国会請願」から約二カ月後  
の広島県被団協結成に続いて、七  
月一八日に安芸郡原爆被害者団体  
連合会、同二四日に海田町原爆被  
害者会が発足しています。記録に  
当たると郡全体の会員は四六〇〇  
人を超えて、海田町は二三四人、い  
ずれも桧垣さんが会長を務めてい  
ます。

阿部 池田（勇人）さんは「今度は  
組織をつくつて来なさい」とも言わ  
れました。それで、桧垣先生と夜な

夜な集落を回つて名簿をつくり、会をつくるお手伝いをしました。桧垣先生は奥さまや五番目の小さい娘さんが家の下敷きになつて焼け死んだんです。その悲しみ、原爆に対する怒りを体全体に持つておられ、火の玉のようになつて行動されました。大きい娘さんの縁談で、あの頃はよくあつた問い合わせに役場の人間が「桧垣はアカだ」と言いふらしている話も耳にしました。レツテルを貼られ、差別される中で被爆者のお世話をされました。東京へ何度も出向かれ、政府や国会への陳情は何百回にもなりました（県被団協事務局長を退いた一九八四年までに上京は延べ四八九日に上つた）。大変に骨を折られた。苦労をなさつたと思います。

被爆者のよりどころができたのは、本当にうれしかつたですね。それまでは外で擦れ違つただけの見知らぬ人に「赤鬼」とからかわれたり、家庭でも姑さんに離婚を迫られたりして、悲しみに遭つておりましたから。原水禁世界大会に集まつた人たちの言葉、まなこがとても優しく、私は元気をいただきました。差別を

なくす人間としてお付き合いをもらいました。

一県被団協の結成から一九五六年八月七日には、「広島県原爆被害者大会」が平和記念公園に前年できた市公会堂で約五〇〇人が参加して開かれます。阿部さんは「国会請願団」を代表して、①治療費の全額国庫負担②国による健康管理の実施③被害者の実態調査・研究・治療機関の設置④原爆犠牲者への弔慰金、傷害年金制度の制定を提案しています（「広島大会議事録」）一九九五年発行の『原水爆禁止運動資料集』（第三巻収録）

阿部 記憶はおぼろげですね。人前に出るようなことはなく、うつむいて暮らししておりましたから、やれと言つてくださる方がおられたのでしょうか。これを見ると確かに私が提案内容を読んでいますね。自分の思い、叫びだつたのは間違いません。

「これらの要求を実現することは、そう簡単にゆきません。一被害者として、私は同じ病で苦しんでいる人々とともに、斗つてゆきたいと思います。一瞬、五千度という熱にさらされ、幾多の苦しい体験をして、今日まで生きてきた私たちは、この命を一日でも長く、生きながらえたい気持ちで一ぱいです。皆さん、私たち生き残つたものが、強く生きぬくために、お互に、助け合い、手を握つてやりましょう」

—大会では最後に参加者全員が「悲しみに苦しみに」と「原爆を許すまじ」（一九五四年発表）を斎唱しています。

**阿部** あの後、日本被団協の結成大会が開かれる長崎へ向かう汽車の中で、曲を付けてくれた村中（好穂）さんが、広島からの参加者に合唱指導をしてくださいました。村中さんは広島合唱団を指導していた方です。会場へ行くと、壇上のテたなか

ーブル前に私の「悲しみに苦しみに」の歌詞を書いた大きな紙が張つてあり、紹介されてあいさつをしたように思います。

日本被団協は、第二回原水禁世界大会二日目の一九五六年八月一〇日、同じ会場の長崎国際文化会館に約八〇〇人が參集して結成し、こう宣言した。

「かくて私たちは自らを救うとともに、私たちの体験をおして人類の危機を救おうという決意を誓い合つたのであります。私たちは今日ここに声を合わせて高らかに全世界に訴えます。人類は私たちの犠牲と苦難をまたふたたび繰り返してはなりません」「私たちの受難と復活が新しい原子力時代に人類の生命と幸福を守るとりでとして役立ちますならば、私たちは心から『生きていてよかったです』とよろこぶことができるでしょう」

海田町原爆被害者会の『被爆三十年の歩み』（一九七五年発行）によると、会は

桧垣や阿部、東海田町（海田町）婦人会長の三人を派遣した。

—会場の長崎国際文化会館（一九九六年に現在の長崎原爆資料館に建て替え）前で、広島から初の「原爆被害者国会請願」を共にした池田精子さん（後に広島県被団協副理事長）や村戸由子さん（一九五八年に日本原水協の派遣で欧州を回つて原水爆禁止を訴える）、吉川さんらとの写真や、「悲しみに苦しみに」の歌詞が張られた会場で阿部さんを撮った貴重な写真が残っています。

阿部 長崎でいさつをしている、この写真は、首を曲げて下を向いています。書いてきた文書を読んでいるんでしようね。「みんな、被爆者は団結して、平和を求めましょう」とかいうような話をしたような気がします。歌を作ったから壇上に立たせてもらつたんですけど。参加者の皆さんとともに歌つたことはよく覚えております。私ですか？歌うのは好きですが、その他大勢のアワワ、うまくは

ありません（「原爆被害者援護法」を討議した原水禁世界大会・第四分科会の最後に参加者全員で合唱し、日本被団協の結成大会は同じ会場で午後七時から開催された）。



1956年8月10日、日本被団協の結成大会は長崎国際文化会館で開かれた。自作の「悲しみに苦しみに」の詩が張られた壇上であいさつする阿部。

—さらにこの年の一九五六年一一月には、県被団協や広島合唱団の共催による「広

島のうたごえ」大会が基町（中区）にあつた児童文化会館で開かれ、「悲しみに苦しみに」がやはり披露されていきます。

阿部　名もない、しかも虐げられ、我慢して暮らしていた私なんかのつぶやきみたいな歌が広まり、本当にうれしかったです。三番目の兄良三が勤めていたキリンビール（安芸郡府中町の広島工場）でも歌声大会があつて、「悲しみに苦しみに」が歌われたそうです。兄が合唱のリーダーに「作詞したのは私の妹です」と言つたら「本当か、腹違いじゃないのか」と冗談を飛ばされたそうです。母に誇らしげに報告しました。主人は、私が被爆者の活動に参加して元気をもらつて帰るのを喜んでくれました。県庁でお世話になつていきましたが（一九五五年に県職員）、原水禁世界大会へも快く送り出してくれましたよ。

長崎で私の「悲しみに苦しみに」を知った酒井（忠好）さんは、わざわざ海田町砂走の私の家を搜して訪ねて来られました。お父さんが艦砲射撃に遭い亡くな

つておられた遺児でした。戦争で不幸になつた人たちに思いをかけられ、私にも優しくしてくださいました。岐阜県の羽島市長になられ（一九八〇年から二期）、証言に呼んでいただきました。秘書だった方とは今もお付き合いがあります。私の誕生日には必ずカードを送つてくださり、この前も、私が今いるこの「八景園」（南区の老人ホーム）にご夫婦で来られました。ありがとうございますよ。

「原子爆弾の被害者が今なお置かれている健康上の特別の状態にかんがみ、国が被爆者に対し健康診断及び医療を行う」。社会の片隅に追いやられていた被爆者自らが声を上げて団結し、地元自治体や医師、選出の国会議員も動いた。一九五七年四月一日、原爆医療法は施行される。しかし、原案にあつた医療手当の支給が削られるなど心身ばかりか生活基盤も根底から破壊された被爆者の救済には程遠かつた。日本被団協は国家補償に基づく被爆者援護法の実現を求めていく。

安芸郡海田町に住む阿部静子は一九六〇年九月二八日、被爆者健康手帳を広島県から交付された。

—被爆者救済と原水爆禁止は、被爆者運動の柱でした。英國による南太平洋クリスマス島での水爆実験の中止を求めて一九五七年三月二十五日、吉川清さんや「八・六友の会」でも一緒だった河本一郎さん（六〇年には原爆ドームの保存を呼びかける）ら四人が初めて、原爆慰靈碑の前で抗議の座り込みをしています。一九七三年からは核実験の実施が報道された翌日には座り込む、今も続く被爆地広島からの連続抗議活動に参加されたことは。

阿部 誘われて一回か二回あります。いつだつたか詳しい年は覚えておりません。抗議文をどなたかに渡されて読みましたが、私は進んでそういうことができず、情熱がまだまだ足らないなあと感じたことを覚えります。森滝（市郎）先生が

こう話されたのを何度も聞きました。「小さな女の子が『座つとつちや止められはすまいでえ』と目の前でつぶやいたのが私の胸に突き刺さった」と言われました（女兒の問い合わせから、森滝は「自分のためではないもののために座っている」のであり、座り込みを通じて「精神的原子の連鎖反応が物質的原子の連鎖反応にかたねばならぬ」と思ったという）一九八四年発行『座りこみ10年—ヒロシマの記録』収録の『座りこみ10年』の『前史』と理念）。

私も何か行動を起こさなければ、事は運ばないと心ではいつも思つております。海田の田舎において活動すると、役場で陰口をたたかれ、そういうことにも反発を感じておりました（海田町原爆被害者会の幹事を一九五九年から務めていた）。

森滝市郎は広島高等師範学校教授だった一九四五年八月六日、江波町（中区）

の三菱重工業広島造船所の動員学徒教官室で被爆し右目を失明する。原爆孤児を支援する「精神養子運動」や「平和と学問を守る大学人会」を開催し、五五年発足の日本原水協、五六年結成の日本被団協の代表委員に就任。原水禁運動の分裂後も被爆者運動を率いて、「人類は生きねばならぬ」「核と人類は共存できない」と核の絶対否定を国内外で訴え続けた。九四年に九二歳で死去。

一九九六年に亡くなつた藤居平一さんの追悼集『人間銘木』（一九九七年発行）へは、阿部さんは追悼文「火の玉の救世主」を寄せられています。

「被爆後十年間、日本政府は何の手も伸べてはくださらず、そこに居るかとも言つてもくださいませんでした／世の中には神も仏も無いものかと悲痛な思いで暮らしておりました。そんな時、捨て身の救世主として、藤居先生は立ち上がつてくださつたのです／暗い私共の心に灯を点してくださいました」

先人たちの多くが亡くなり、被爆者運動の始まりからを知る数少ない一人となりました。あらためて今、どんなことを思われますか。

阿部 出会いを得た人々、亡くなられたの方たちの熱い心、行動を知つておりますから、私なりに何とか運動をしようと生意気なことを考えて証言活動に取り組み、生きてまいりました。自分の力不足を何回も体験しました。けれど、それに負けずに続けてきたと思っています。石を投げなければ波も立ちません。今もそういう気持ちはありますが、体が思うように動きません。この世で「最後の証言」だと思って、皆さんのお尋ねにしつかりこたえようと思つております。

# 3

## 冷戦下の 世界平和巡礼



1964年4月16日、広島駅を出発する世界平和巡礼団のメンバー。横断幕の前列右から3人目が阿部、左端に団長の松本卓夫さん、その後ろにバーバラ・レイノルズさんが写る。

(中国新聞撮影・提供)

阿部静子は安芸郡海田町で実家の田畠を耕し、二男一女の子育てと忙しい日々が続いていた。そこへ思いもしなかつた要請が舞い込む。三七歳だった。

—海田町が町制六〇年となつた二〇一六年、「農耕牛を使う阿部さん」という写真が中国新聞に掲載されています（九月三〇日付「かいた今昔」第七回、写真提供は海田郷土文化研究会）。初の東京オリンピックが開かれる「一九六四年撮影」とあり、記事では「このころ、海田町内で牛を使う農家の女性は2人いて、そのうちの1人が私でした」とコメントしています。

**阿部** 米とイチゴの二毛作をしていた頃です。田んぼは、もともとは実家の父がやつっていました（大力万吉は一九五八年に七八歳で死去）。父は、末の娘が原爆でこういう体になつて嘆いて、嘆いて、最期まで気にしていました。私も親不幸な娘じやなあと思うて、いつもすまんなあと思うて暮らしていたもんですから、父

が足を悪くして牛使いがちょっと無理になつた頃から、罪滅ぼしというとなんですが、傷が残るこの手足でするようになりました。百姓仕事は私にはまつていたように思います。

— 実家の田は、どれくらいの広さだつたのでしょうか。

阿部 一町歩（約一㌶）くらいでしようか。今なら耕運機でバタバタと耕しますが、牛を使ってコトリコトリと時間をかけて耕しておりました。



1964年春、安芸郡海田町砂走の実家の田を牛で耕す阿部夫の三郎が撮影。

田は生き物ですからね。主人は県庁の土木部門に勤め、音戸大橋の用地買収などで忙しくしていました。でも日曜の朝晩には、牛小屋のフン掃除を頼まずともやつてくれました。大力の母のことも何かと心配してくれてね。母が亡くなつた時（ツ子は一九八一年に九八歳で死去）、姉たちは「静子が家のために一番力になつたんだから」と言つてくれて相続しました。

—写真が撮られた一九六四年に、冷戦下の米国からフランス、東西ドイツ、旧ソ連などの八カ国を回る「広島・長崎世界平和巡礼団」に参加します。どのような経緯でメンバー募集に手を挙げられたのでしょうか。

**阿部** 私の「悲しみに苦しみに」の詩を、広島ベンクラブの会長だった田辺耕一郎さんが高く評価してくれました。その田辺さんから「こういう機会があるんだ。阿部さんぜひひぜひ参加してください」と言われました。私が田んぼで耕作をやつ

ていたのは、傷がひどいし、人前に出る必要もなかつたこともあります。目立たんように暮らしていました。しかし、田辺先生が何度も勧めてくださいますから、それじやあと手を挙げてみたら意外にも採用になつて。それでもまだ悩んでおりましたけれど、主人が「せつかくだから行かせてもらひなさい」と背中を押してくれたんです。

—田辺さんとの付き合いは長かつたのですか。

**阿部** あの先生はフランスでしたか、被爆者を励ましてくださる基金を受け取つて宇品町（南区）で「憩いの家」をやつておられました。時々招いて、奥さまの手料理で押しづしやら、故郷の雑煮やらを振る舞つてくださいました。

「広島憩いの家」は、フランス在住の米国人作家アイラ・モ里斯とスウェーデ

ン人作家エディタ・モ里斯が呼びかけて一九五七年、広島市内の病院へ通う被爆者（木造2階）として開所。田辺耕一郎は五〇年に日本ペンクラブ（会長・川端康成）の広島訪問を働きかけ、国際ペンクラブ理事のモ里斯夫妻の支援へつながった。施設は、田辺が九一年に八七歳で死去した翌年に閉鎖。

—派遣メンバーに選ばれたのは、誰から聞かれたのですか。

阿部 電報が家に届きました（昭和三九年一月一六日発信の「スナバシリ（海町砂走）アベシズコ」宛て電報は、「サンカパス 一八ヒ（日）（午後）一ジ イシカイカンエコラレタシ レイノルス」）

—バーバラ・レイノルズさんとも知り合いだったのでしょうか。

阿部 新聞でお名前や活動は知っていましたが、お会いしたことはそれまであり

ません。電報を受け取り（下中町、現在の中区中町にあつた市医師会館へ）行つたのはいいけれど、大学の先生やお医者さんと偉い人ばかり。これは大変だなあと思いました。しかも、女学校時代に英語は「敵国語」だったので全く馴目、パースポーツを手にしても自分の名前をローマ字で書くのにも苦心しました。本当に行くとなると、三人の子を置いて行くわけですよね（当時、長男は高校生、次男は中学生、長女は小学生）。姑さんは、私がいないと喜ぶ人でしたから長旅もいいかなと思って。主人は、原爆の傷がある女房が世界を巡ることを喜び、口にはしませんでしたが誇りに思つてくれたと思います。

「世界平和巡礼」を提唱したバー・バラ・レイノルズは、原爆傷害調査委員会（ABC）へ夫が赴任した一九五一年から広島で暮らす。「被爆者は世界の平和への動きを促進させる力がある」と六二年は自身を含めて三人、六四年は長崎からも

募り、私財を投じて巡礼を実現。六五年には外科医原田東岷らとワールド・フレンドシップ・センター（WFC）を南観音町に創設する（現在は中区舟入中町）。クエーカー教徒であり、「私も被爆者」を口癖とした。九〇年に七四歳で死去。

——日本人の海外渡航が自由化となつたのがやはり一九六四年です。「広島・長崎世界平和巡礼実行委員会」（名誉委員長・浜井信三広島市長、委員長・原田東岷市医師会長）は国内や訪問先での募金から旅費に充てる計画でしたが、身の回りのお金はどう工面されたのでしょうか。<sup>せんべつ</sup>一ドルは三六〇円でした。

**阿部** 近所やいろんな方が私を励ますためにお餞別せんべつをくださいました。先ほどの私が農耕牛を使う写真も、向こうで会うことになつていた4Hクラブ（農業青年クラブ）の方たちに見ていただきくために主人が撮つてくれたんです。ハワイには大力の親戚、カリフォルニアには兄がいましたから。女性は「日本着を用意する

よう」に」と言わされたので一重の着物をあつらえました。主人は私用のカメラも買つてきて、初めてカメラを手にして撮影の特訓を出発前に受けました。

—平和巡礼団は四月一六日、静岡英和女学院長の松本卓夫さんを団長に四〇人が広島駅午後三時二〇分発の上り急行「安芸」で出発した、と当時の新聞記事にあります。メンバーでお知り合いはいましたか。

阿部 河本時恵さんくらいです。吉川（清）さんのお店で知り合い、「八・六友の会」でも一緒に緒させてもらいました（一九五五年の第一回原水禁世界大会に長女を抱いて参加し、会の旗を河本と手にする写真が『原水爆禁止運動資料集』第二巻に収録。<sup>51</sup> 参照）。団長の松本先生（広島女学院長の時に被爆し、妻は死去）、芝間タヅさん（稻荷町で被爆。戦前に留学経験があり、市内で英語教室を運営）、副島まちさん（南千田町Ⅱ中区南千田西町Ⅱの自宅で被爆した一三日後に自らが

へその緒を切つて四男を出産。兵庫県原爆被害者の会を結成した一九五六年に『あの日から今なお』を著す）も存じあげていませんでした。

阿部が保存する「平和巡礼団員名簿」には二五人の名前が記載される。「農業阿部静子」や広島原爆病院医師、物理学者、宗教家、労組書記長、評論家（織井青吾、名簿では本名の浜井隆治）ら多士済々の顔ぶれ。別の手書き名簿には同行訳は「ICU（国際基督教大）学生九名」とある。団員となつた中国新聞社社会部次長・満井晟による同行記「世界の中のヒロシマ」（一九六六年発行『炎の日から20年』収録）によると、被爆者は長崎を含めて二六人がいたという。

—米国へ向かうに当たつて、どんなことを思われたのでしょうか。

阿部 私は原爆の「生き証人」として、偉い皆さんのが車のボディーならそれを支

えるピンになろうと思いました。「目立つたことはしなくても任務だけはしつかり果たすんだ」と主人にも言われました。特別な使命を持つて行くのだから、ちょっとと责任感もあつて「旅日記」をつけました。旅の間に主人とやりとりした手紙も残っています。亡き主人（阿部三郎は一九九二年に七三歳で死去）の書斎本箱にあつたそうです。孫を私たちの家に住まわせるので片付けをしたら出てきて、次男がこの前、ここ（阿部が暮らす南区の老人ホーム「八景園」）を持ってきてくれました。残っているのに私もびっくりしました。

—今まで折に触れて手に取つたり、読み返したりはしなかつたのですか。

**阿部** 一切ございません。この私の「旅日記」が貴重かどうかは分かりませんが、どうぞお読みください。

〔昭和39－4－16日 木 晴 今日はいよいよ出発である／ご近所の方々も

皆家族を失い、自ら傷つき、後障害に苦しむ方々である。私の出発を心から喜び  
力づけてくださった／此の御支援にこたえる意味でも私の全力をつくし、世界の  
人々に原爆のおそろしさを語り、空むなしく苦しみ亡くなつた人達の平和への願いを  
代弁する決意である」

—平和巡礼団は、神奈川・箱根で合宿して駐日大使館員や専門家から訪問先の事  
情を聞き、四月二一日に羽田空港を飛び立ちハワイ・ホノルルへ向かいます。

最初の訪問地で真っ先に浮かぶ記憶、思い出は何でしょうか。

阿部 日本から移民された方々が明治・大正の心というか、お寺をとても大切に  
されている姿です。その頃、私どもはだいぶ信仰心が薄れていましたから。オア  
フ島から向かつたハワイ島で私は通訳の方とお寺にも泊めていただきました。そ  
れと、主人が現地の新聞へ私が全く知らないうちに投稿していて、「大力の娘さん

が来るそうな」と親戚や海田ゆかりの人が大勢来てくださったことです。

「ハワイ・タイムス」へ阿部三郎が送った手紙は一九六四年四月一八日付に掲載された。「日布時事」を一九四二年に改題した同紙は八五年に廃刊。

「妻が原爆の被害者としてこの世界平和親善使節団の一員に加わるにあたって、私の最も懸念していることは、米国人、特に在留邦人の多くの方々に心から歓迎し、その労をねぎらつていただけるものと確信していますが、一部の人達には原爆被害者がみにくい傷跡を見世物として白人のあわれみをこいに来たのではないかと誤解される点でございます／広島の被爆者の願いを、一人でも多くの国々の方々に知つていただきためです／渡米以来のご苦闘によつてアメリカ、殊にハワイの中核をなす基盤を築かれた皆様／妻の気持ちは純粋です。この傷ついた心

と身体を捧げさそて一農家の主婦として、牛耕も畑作も誰にも負けずに立派にやり遂げて来たのです。私達のような被爆家庭があることを知つていただき、明日へのよりよい世界の平和に、共に進む勇気をお互いに持つていただく為にも、妻は皆様に何ものかを訴えることだと思います」

—いわゆる「亭主闇白」が当たり前だったのに、三郎さんの妻への気遣い、愛情の深さはすごいですね。

阿部 ありがとうございます。自分も戦った米国へ女房が被爆者として行くのだから批判されるのではと心配したんだと思います。近づく三三回忌の法要は盛大にしようと思っています。

—先ほど「私は生き証人」と言われましたが、米国の人々に何を一番に伝えよう

と思われたのでしょうか。

阿部 原爆で人が大変な被害を受けた、被害者が今もいるんだということを米国の人たちに知っていただきたい、その一念でした。ご存知ないんですよ、原爆の被害について、原爆被害者の多さを米国は。原爆を投下したけれど「被害は軽微であつた」などと国民に世界に対しても報告したそうで、何が軽微なもんかと反発もしております。原爆によって、私の体はこうなつたことを聞いていただきたいな、と思いました。

—被爆から一九年、原爆を落とした米国を恨む気持ちは薄れていったり、消えていたりしたのでしょうか。

阿部 なかつたというと、うそになります。被爆してからの日々は、もがいて、もがいて暮らしておりましたからね。いろいろと恨んだり、死にたいと思つたり、

嘆いたり、鏡を見ては諦めたりしておりました。この顔を抱えて子どもたちの参観日へ行くんですよ。孫はかわいい姑さんが「行つてやんなさい」と言われるから、行かしてもらうんですが、美しいお母さんたちの間に交じつて参觀すると、子どもが肩身の狭い思いをするのではないかといつも思っていました。自分の不運を嘆きました。原爆さえなければ、それもこれも戦争をしたからなんだ、戦争や原爆はなくさなければ、と思うようになりました。その頃には日本軍が中国でしたことも知つておりました。憎むべきは戦争だと思います。

平和巡礼団は四月二三日ロサンゼルスへ降り立ち、米国本土を西海岸から回つていく。阿部が大学ノートに横書きしていた「旅日記」を繰る。

「4・23 16階のルームに泊まって洋風バスを初めて使った。何もおそれること

とはないではないかと思つた／至るところに大鏡があり、自分の姿がよくうつつた。つくづく米国ロスアンジエ尔斯まで来る姿ではない。しかし来ているのだ。

夜2時に休む」

「4・26 午前10時、（ロサンゼルス北東の）パサディナ仏教会で／3人でスピーチをする。日系の老人や子供が本堂へ一ぱい参つておられた／（安芸郡畠賀村出身の一女性に）砂走の大力だと云つたら／おぼえて下さっていた。5ドルお小遣いを下さる。日本料理屋で冷ヤツコと赤だしとお寿しをごち走になる」

「4・27 クエーカー教徒の子供ばかり集まる小学校6年から8年までにお話した。皆熱心に聞いていた。人種はいろいろで黒人もいた。大切な勉強時間をさいて私共の話を聞いて下さるのに感激した。兎に角愛情深い国民である」と

「4・28 サンフランシスコ行の飛行機に乗る。そして此の日記を書いている／空港につくと一番先に農武のぶいち一兄が立つてくれた。九人出迎えていてくれた。

特に心配していた兄の歓迎に心から泣いた」

一団はロサンゼルスから「北、中、南」の三コースに分かれます。南部へ向かう前に、阿部さんは松本団長や満井記者、通訳の女子学生、ＩＣＵ生だったバラさんの息子とカリフォルニア州都サクラメントを三〇日に訪ねています。

兄の大力農武一さん（一九〇三年生まれ）は向こうにお住まいだつたのですか。

阿部 農武一は、私の父万吉の弟で米国へ渡つた房吉の長男でしたが、万吉の次男として育ちました。父も若い頃は米国に少しおりました。房吉さんは「貧しい日本にいないで來い」と言うので、兄一人は叔父を頼つて渡つたわけです（一九二二年発行『在米日本人々名事典』によると、大力房吉は奥海田村から〇六年に渡りサクラメント郊外で食料雑貨店を営んだ）。長男の要（一九〇一年生まれ）は、子どもを大力の父母に見せるために帰国して真珠湾攻撃が起きて戻れずじまいです

した。



カリifornia州サクラメントで  
レストランを営み、別邸に日本  
庭園を設けていた兄の大力農  
武一夫妻。

兄弟のうち米国にずっといたのが、この農武一です。戦争中は（西海岸に住む日系人の強制収容で）ソルトレークですか、冬は塩水も凍るひどい所へ送られ、要の下の子がそこで死んだのも手紙で知つておりました（ユタ州ト・パーズ収容所とみられる）。農武一は戦後にレストラン経営で成功し、実家へいろんな物資を送つてくれました。私が被爆者として来ることへの批判を案じ、警戒感も持つてい

ましたが、兄嫁のお母さんも空港に来られて大変な歓迎でした。サクラメントの仏教会でのスピーチでは、私が一番心を打つたと褒めてくれました。

「カリifornia州最古の日刊紙」と

題字に刷る「サクラメント・ユニオン」五月一日付は一・六面で、松本団長やミセス阿部らと副知事との面会写真を「地獄からの帰還のような原爆からの生存」「平和を求めて州都を訪問」の見出しを取って掲載。阿部の「皮膚を剥がれ耐えがたい痛み」との証言や、戦地から戻った夫と二男一女の親となつたこれまでの半生、サクラメント在住の兄トーマス・ダイリキとの喜びの再会を報じていた。

—阿部さんらの「南コース」第二班は、テキサス州へ向かう途中の五月二日サンフランシスコに着き、巡礼団を受け入れた平和団体が名所のゴールデン・ゲート・パーク（金門公園）で、バーベキューやフォークダンスの催しを開き、団員も楽しんだと同行記にあります。ダンスはされましたか。

阿部 いいえ、重大な使命を持って行つたのですから私は浮かれて踊つたりはしませんでした。物見遊山の気持ちは全然なかつた。それに私は人妻ですから。米

国でも目立たんようにしておりました。

—「旅日記」を繰ると、翌三日の日曜日は南部テキサス州ダラスへ飛び、教会でスピーチをして、支援者の車で州都オースティンへ移動、市民約20人と夕食を取りながら体験を語り、質問に答えています。四日は地元の新聞社で取材を受け、バスでダラスに戻つて空路、中西部ミズーリ州カンザスシティーへ。まさに強行軍です。

阿部 米国は大きく、広いし、休みはなかなか取れませんでしたね。

—スピーチは日本語で書いて臨んでいたのですか。

阿部 原稿なしで話すこともありました。私の通訳は、広島出身の藤井敦子さんといい、国際基督教大の学生さんでした。高校の時に留学されておりまして、発

音がよく、  
行く先々で  
褒められて  
いましたよ。

通訳の人た  
ちは学校か  
ら選ばれた  
そうです。  
彼女は平和

巡礼のことを卒業論文にしました。結婚されて横浜にお住まいでの年賀状のやりとりが続いております。



1964年5月21日米国オハイオ州コロンバスの宿泊先となったフランクリン家で。左が阿部、右は巡礼団通訳の藤井敦子さん。撮影者のアイアーマン・フランクリンさんは写真館を営んでいた。

—宿泊・食事を提供するホスト家族にも原爆のことを進んで話されましたか。

阿部 いたしました。食事をする時も、こういう手ですから皆さんにね、手がこうなつた説明をしました。箸を持つている姿を写真に撮つて、「箸運びが優雅」とかおっしゃる。この不自由な指を思うとね、「何が優雅か」と心の中では反発もしました。しかし、受け入れてくださる皆さん方が、私を慰めようとしている、慎み深く信仰を持つていらっしゃるのが、だんだん分かりました。泊めてくださる家のご主人は食後に後片付けをされ、家でアルコールを召し上がる。大学や留学で空いている子どもさんのベッドを使わせてもらいましたが、日本のように冷たい布団を敷いて休むようなことはございません。とにかく皆さん、心も豊かなハイクラスの方でした。

—旅を共にしたバーバラ・レイノルズさんはどんな方でしたか。

阿部 とにかく平和主義者、人間愛に満ちた方でした。温かく、人当たりのよい、お母さんのような人です。バーバラさんとの会話は藤井さん、彼女がいない時は芝間先生（広島で英語塾を営む団員の芝間タヅ）に通訳をしてもらいましたが、私だけでなく皆さんにもそのように接しておられるように見受けました。

—そして、いよいよ五月五日には、広島・長崎への原爆投下時の大統領だったハリー・トルーマンと面会します。「旅日記」でこう書かれています。

「2時より松本團長との面談あり。終始にこやかな会談であつたけれども、実のないあつけない面会なり。80才とも思えぬ元気さである。原爆使用についていけない事だと思ふ、それについて国連を強化して自分の責任において何とかするから見ておれとかの会談であった由」<sup>よし</sup>

元大統領との会見はカンザスシティー隣町の郷里インディペンデンスにあるトルーマン記念図書館の講堂で行われた。面会は巡礼団が申し入れた。「世界の中のヒロshima」によると、団長の松本卓夫と壇上で握手し、「あの当時、双方で五〇万以上の死者ともっと多くの負傷者を出さないよう戦争を終結させるのが目的だった。それを使わなければ仕方なかつたということだ」と述べた。阿部や後述する高校教諭の森下弘

(当時三三歳) ら被爆



1964年5月5日、世界平和巡礼団を代表し、  
ハリー・トルーマン元米国大統領（手前）  
と会見した団長の松本卓夫さん。  
(原爆資料館所蔵の「松原美代子資料」から)

者七人が椅子席で見守った。

—トルーマンと会って、今も記憶に残る思いはどんなことでしょうか。

阿部 この人が原爆の使用を命じたんだと考えながら見つめておりました。被爆者ばかりが来とのに、私たちに頭を下げるでもなし、謝るでもなし、肩透かしされたような気がしましたよ。

—拍子抜けした、と。怒りが沸いたということはなかつたのですか。

阿部 原爆で大けがをした今も苦しんでいる人が目の前におるのに、ことわりはないなかつた。何も言うことがなかつたんですよ。人間はね、心にないことは言えません。だからトルーマンさんも（原爆使用は）当たり前のことじやあと思つておられたんですよ。やっぱり、われわれ被爆者は、期待する気持ちもあつたかもし

れませんが、むなしい気持ちで帰りました。



県立広島一中三年の夏に建物疎開作業に動員されて鶴見橋の西側で被爆した、森下弘は「平和巡礼報告」（一九六五年発行の『廿日市高校教育研究年報第五号』収録）でトルーマン元大統領との会見をめぐり、「質問を用意してはじめはさすがに動悸どうきがしたのに、団長と壇上で握手して一、三応答が交わされただけで、全くあっけない感じだった」と記している。

日本は高度経済成長期にあったが、全国的な新聞・通信社や放送局の特派員は米国でも少なかつた。会見は、同行した「カンザスシティー五日満井本社特派員」発の記事（中国新聞一九六四年五月七日付）で広島へ届く。「地元の夕刊紙は一面に巡礼団の様子を詳しく報じ」、NBCなどのネットワークで「全米にテレビ放送

された」と反響ぶりも伝えている。

では実際、米国の代表的なメディアは元大統領が被爆者と会った内容をどのように扱い報じたのだろうか。ニューヨーク・タイムズは、会見の翌五月六日付で「トルーマン 原爆生存の日本人八人を歓迎」の見出しを付けて、現地発AP電を載せていた。写真は付いておらず扱いは小さい。全文を見る。

「広島、長崎で原爆を生き延びた日本人八人が、第二次大戦を終結するため原爆投下を命じたハリー・トルーマンに昨日会った。一行は、四人の通訳者とインディペンデンスにあるトルーマン図書館で面会した。トルーマン氏は訪問者へ次のように語った。『あなた方を迎えてうれしい。図書館内を見て、わが国が提供すべきものは何かを分かつていただけるのは幸いだ』。松本卓夫、七六歳、東京に近い静岡の女子短大学長（静岡英和女学院院長）が一行を代表してトルーマン氏にあいさつした。『戦争中とはいえ、あの決定はあなたの役目において非常に重い

責任だったろう』。トルーマン氏はこう述べた。『双方で五〇万人以上の死者と負傷者を出さないように戦争を終わらせるためであつた』『戦争を指導する時の目標は勝つことだ。(戦後は)私たちに恨みがないことを示してきたと思う』。

これに続く最終段落は「世界平和巡礼の一行が四月二一日に東京を出発し、会見の当地からセントルイス、オハイオ州などを回って来月七日パリへ向かい、東西ベルリン、モスクワへ行く」計画を紹介していた。



—国内に時差もある米国を飛行機や支援者の車、バスを乗り継ぎ、全く見知らぬ土地で証言をする。泊めてもらった民家では、通訳がいるとはいえ、ナイフとフォークで食事をしながら話す。そんな中で「旅日記」がよく続きましたね。

阿部 他人さまにお目にかけるもんじやないから、あつたことを忘れないように

ただ書いただけです。特別な使命をもつて行きましたから書き留めておかないと  
いけない、そういう責任感もありました。また、ご近所の方やらハワイの親戚や  
海田ゆかりの方々、サクラメントの兄家族から心遣いをいただき、帰つてからお  
土産話や、お礼をせにやあいけんとも思つて書いたんです。

——「あっけない」と記したトルーマン会見の翌五月六日は、カンザスシティ一大  
でスピーチをして、聴衆からの質問と返答も書き残しています。今日に続く核  
兵器を巡る米国市民の「原爆観」や葛藤もうかがえます。

阿部 そうですか。どうぞ、お使いください。

米市民 「平和があると思ふか、自分はあると思ふが？」

阿部 「全面軍縮のなされない間は本当の平和（は）ない。平和そうに見え

る丈である。それでこそ我々が今日こうしてはるばると出掛けているだけではないか」（前年の一九六三年、米英ソ連の三カ国が地下を除く大気圏内、宇宙空間および水中での核実験を禁止する「部分的核実験禁止条約」<sup>など</sup>にようやく仮調印していた）。

米市民

か？」

阿部

「我々の生きている間は語り伝える事も出来るが、我々の命にも限りがある。完全軍縮のなされる時までは必要だと思っている」

続いて「平和運動をやりたいと思ふけれど、米国ではすぐ共産思想保持者とまちがえられ見られる」「現行政治なら、かつての様なパール・ハーバ（真珠湾攻撃）の様な事件は起きないと思ふか」との質問を書き留めている。

一旅の先々から一一ヶ（約四〇円）切手を貼つて便箋・封筒が一体のエアメール（航空郵便）を夫の三郎さんへ送られています。しかも長文の手紙です。数えたら二二通ありました。

阿部 無事に旅を続けているのを伝えるには手紙しかなかつたですね。家のことも心配でした。育ち盛りの子ども三人を置いてきましたから。主人は子どもたちの様子を小まめに記して、私への励ましもたくさん書いてよこしてくれました。孫がかわいい姑さんは、修道高へ通う一番上の子に弁当を作つて持たせてくださいました。大変だったようです。

――主人への手紙では、手応えも愚痴も余すことなく書いています。被爆証言を言葉も文化も異なる地で伝えるやりがい、困難さ、市民によるプロジェクトの舞台裏が図らずも浮かび上がります。抜粋して旅をたどります。

阿部　主人が取つておいてくれたものがお役に立つならうれしいです。

ミズーリ州カンザスシティー　五月七日投函

「昨日トルーマンに会ひました。私は言葉が分からぬのが大変心労の種になつています。子供達には何とか通用する様、学ばせたいとつくづく思っています／私はもう帰りたいです。皆そう言っています。第二グループのメンバーと三日に一度くらい会いますが、脂こい料理を頂く國へ来て皆、脂の抜けた顔をしています。今からヨーロッパを廻るのかと思ふとうんざりします。四日に二日くらいは休みがある約束でしたが、今のところ全然土曜も日曜もない毎日です」

ケンタッキー州レキシントン　五月一六日投函

「人口十五万人くらいの南北戦争の激戦地であつたと云ふ此の町は：セ

ントルイスを七時に出て実に十二時間バスに乗り続けて／サクラメント以来、米のご飯は食べたことはありませんけれどなれました。毎日少なくて二回多くて四回くらい同じスピーチ事をやつて暮らしていると、あきてきました。

(通訳の) 藤井さんもうんざりしているでしょう／こちらでは上流社会のお宅へ泊めて頂いています。立派づくめで話しになりません／けれども私の世界で最も愛する者五人が待つていて呉れると思ふと一日も早く帰りたいです／此の国の人は礼儀を心得て人の痛いところにさわつたり、じろじろ見ません

オハイオ州シンシナティ 五月二一日投函

「貴方から送つて下さい／『私共の口を通し語る原爆の惨状を体験を一同  
我が事のように涙を持つて聞いて下さり、亡き方々に代わつて広島長崎の被  
爆者に代わつて、心の底からの訴えが出来ました。そして本や新聞ではいろ

いろ広島長崎の様子を聞いているが、私共から聞いた程身に迫つて感じたことはない。よくぞ勇気を出してここまで来て下さったと会ふ人毎にはげまれ、旅を重ねる毎に勇気づいている一同です』。こちらでは朝日の特派員等一人も会ひません』(夫が朝日新聞記者から平和巡礼の様子を尋ねられたことへの返信)。

ウエストバージニア州ホイーリング 五月二四日投函

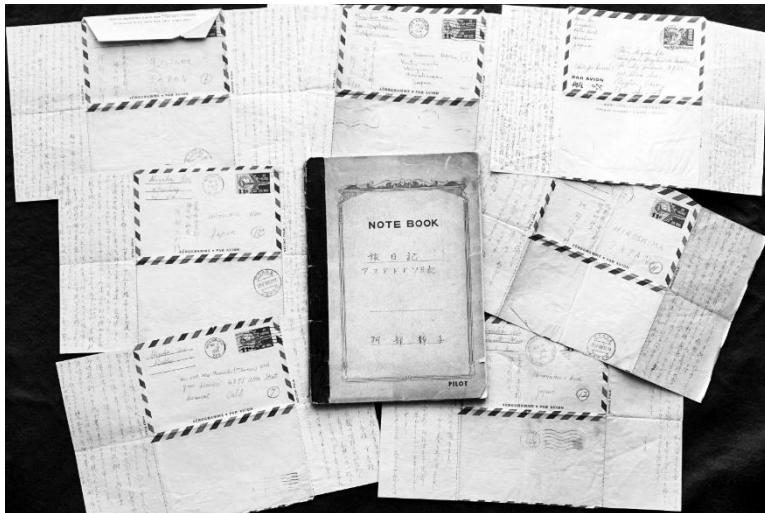
「今日の会合で正式に発表がありましたが、レイノルズ婦人はオハイオにあつた自分の土地を全部売つて資金に当てられた由よし／レイノルズ一家のごくろうを思へば孤独等なんのそのです／ヨーロッパ行きの事は天に任せて一日一日を最善の努力をしようと想っています』(資金難から欧州行きのメンバーを選考する事態が持ち上がつていた)。

首都ワシントン 五月三〇日投函

「ワシントンで第三グループ、第一グループと合流しました。皆疲れた顔をしています／今日二時から全員集まつて大切な発表があるそうです。多分ヨーロッパ行きの人選についてだと思ひます」（『旅日記』によると、阿部は二八日首都に着き、心理学博士宅で泊まつた翌日は郊外の「黒人学校、白人小学校、中学校」の三校で証言をした）。

ベンシルベニア州フィラデルフィア 六月四日投函

「ここではクエーカー教徒の方々の合宿所の様なところへ一同泊まつて全く何の予定もなく休養の一日を送っています／昨日平和巡礼の財状と渡欧人員の中八名が発表されました／それぞれ国情のちがふ国々で、日本人以上に戦争体験の深い人々との間に入つて原爆体験に基づく平和論をぶつのは本当に平和運動の歴史も動きも信念も必要な事だと思ひます。バーバラさんも実に無理な行動を起こされたものと一同この地へ来て顔を見合つています／



阿部が世界平和巡礼団としての行動や思いを一日も欠かさず付けていた「旅日記」や夫三郎とやりとりした書簡。

米国を横断した丈でも私には上出来だと考えています」(英國などの支援組織から招請を受け、まず第一陣二〇人が六月七日米国を出発する)。

—旅先からの手紙に夫の三郎さんは、ニューヨークの平和巡礼団事務局宛てに何度も達筆な字で手紙を送っています。「孤独にならないようお願ひします」「帰つたら電話を一日でも早く家へつけるよう二人で努力しましよう。電話がこれからのお母ちゃんだけ

の活動に一番大きな利器になるでしょう」「ファイルムを写し始める時、巻き戻しがランクが廻っているかを、よく注意しないと」妻の平和活動を励まし、心身を気遣つておられたことに頭が下がる思いがします。

**阿部** 向こうの家庭に泊めていただき、驚いたのがお金持ちのご主人でもエプロンを着けて食器を洗つたりする。米国は進んでいました。主人は家では縦の物を横にもいたしません。威張つていました。でも心は優しかつたです。主人が亡くなり、子どもも優しくしてくれていますが、主人が一番私を思つて接してくれたなあと。夫の愛は深かつたと思つております。

平和巡回団は六月八日、米国での最終講演会をニューヨークのカーネギーホールで開く。松原美代子の琴演奏で始まり、松本卓夫が「人類を絶滅に導く愚かな行為をしてはならない」と原水爆の禁止を訴え、「広島折鶴の会」世話人の河本時

恵が「宗教、人種、国籍の違いを超えて平和のために協力しましょう」と呼びかけた。人気コメディアンの出演もあって約一二〇〇人が集まり、巡礼団へのカンパは五〇〇〇ドル（一八〇万円）に上った（中国新聞一九六四年六月一〇日付）。

松原美代子は一九六二年の第一回平和巡礼に続いて参加し、八二年には市民が描いた「原爆の絵」を携えて全米各地を回る。その後も証言活動を続けて二〇一八年に八五歳で死去。出演したのは、公民権運動で揺れる米国の政治・社会を鋭く突いたセントルイス出身の黒人スタンダップ・コメディアン、ディック・グレゴリーだった。自伝は邦訳もされている。

—阿部さんは欧洲へは第二陣の出発となりニューヨークにいました。「旅日記」に「着物を着て6時迄カーネギーホールへかけつけた」「一同を集めてリハーサルである」と書き留めています。あの有名なカーネギーホールのステージに上が

られたのでしょうか。

阿部 あまり覚えておりません。私は田舎者で芸も何もございませんので、これといったことはしなかつたと思います。

—集会の直後に夫の三郎さんへ宛てた手紙ではこう伝えています。

ニューヨーク 六月八日投函

「カーネギーホールでお金集（め）をするのに顔に傷のある者ばかり残つたわけで一同不満に思つていますが、或る意味から云えれば、それが意とで我々は選ばれたのです。訴える力を持つています。今少しの我まんです。だまつてしましよう。何事も気持の持方一つです。悪くとらないで……貴方が考えている程世界旅行は甘くも楽しくもありません」

阿部 忘れていました。自分の手紙を読み返してもおりませんし。広島を出発す

る時、皆さん立派な方々ばかりですから、私なんかでいいのだろうかと思ひながら、「生き証人」として人のできないことをやらせてもらおう。そう決意して、一緒にしていました。だから旅を続けられたんだと思います。

一三日後の一一日には、国連本部でウ・タント事務総長と会い、国連放射能委員会が原爆の影響について調査するよう要望書を提出します（共同通信ニューヨーク発の記事では八人が訪問）。阿部さんの「旅日記」には「平和の子の像を渡し、ありがたいお言葉を頂き帰った」と記して、「原爆の使用はどこでどの様な理由においても許すことは出来ぬ」「核兵器保有国に実験禁止を認識させる」など事務総長の発言を書き留めています。

阿部 国連での実感は全く残つていません。付いていつただけです。

—日本と戦つた元兵士らが健在であり、原爆使用の正当化論が一般的だつた六〇年代半ばの米国で、原爆による惨禍や放射線障害が続いていることを伝え、原水爆の禁止を訴えた。人々の暮らしや息遣いにも触れました。米国巡礼で忘れられない記憶は何でしようか。

阿部 一番に、日本の子どもたちのことを思い出して涙が出るほど豊かな国でした。こんな国と戦つて勝てるわけがないと思いましたよ。訴えが届いたかどうかは分かりませんが、私のやけどの傷を見て、「まだ、こういう人がいるのか」と目を見張っていました。原爆に対する認識を少しば改めていました。

日本では「赤鬼」と言われたり、姑さんから離婚を迫られて入籍が遅れたり、いろいろありました。そういうことがあつて、米国の方たちに優しく真心から迎え入れてもらい、日本で凍つた心がしつかり解けていく気がしました。米国の方もそうですが、日本の若者にも、どこの国の人にも私のような目に遭つてほしくな

い。そのためには、核兵器の廃絶がとても大切なことだと強く思うようになり、私なりの活動へとつながったと思思います。

——ニューヨークにいた阿部さんら二〇人は六月一二日にジョン・F・ケネディ国際空港を飛び立ち、オランダ・アムステルダムを経由してフランス・パリに入ります。英国ロンドンで活動していた先行グループとパリで合流します。欧洲になると三郎さんへの手紙が見当たりません。

阿部 送つていな氣がします。米国で見たり聞いたりしたことほど伝えたいようなことがなかつたんでしょうね。疲れてもいました。

——「旅日記」は一日も欠かさずつけていますが、確かに「眠くて仕方がない」と。

一四日は「広島憩いの家」を創設したアイラ・モ里斯夫妻の邸宅に招かれ、一

六日にはサークルで有名なパリ一一区のシルク・ディベル劇場を会場に科学者らが開いた集会で、阿部さんら被爆者五人が証言をしています。「2000人の大集会であるパリーの大集会である」と記していますが。

阿部 よく覚えておりません。欧州で覚えているのは、ユダヤ人（強制）収容所を訪ねたことです。殺された人たちの髪の毛が、山のように茶色やら何やら積んであって、履いておられた靴がまた山のようになんであって。そこへ入つたら何とも言いようがない臭いがした。とても複雑な気持ちになりました。

平和巡礼団はベルギー国王に招かれた一〇人を除く一行が一七日西ドイツへ入り、冷戦の最前線でもあった東西ドイツの両ベルリンで討論会や会合に臨む。一九日には、東ベルリン郊外のザクセンハウゼン収容所を訪ねていた。阿部の「6

「人間の手によつて人間が殺され人間が人体実験に使用された事実を説明され、当時の記録映画を見、解剖室、死体保存室、実験手術室。一度に8人を入れられて焼く事の出来る人体焼却器が40も並んでいる。火葬場等を見た氣のせいでもなく、たしかに一種異様なにおいが収容所全体に立ちこめていた。そのにおいは、かつてユダヤ人が苦しみ悲しみのろい乍ら死んで生き残した死臭であるように思へた／我々も広島長崎で多くの死者を出し、うらみ、のろつて暮らして來たけれど、一度にはばつと殺され焼かれたのである。1人1人が1人1人の人間の手と心によつて殺された事実には心から怒りを感じた」

—欧洲に入つてからの「旅日記」は、「夜遊びもはなはだし：朝から気分が重い」

と、同行通訳らの行動に不満を抱いていたことも書いています。

阿部 ホストのアパートで朝まで心配したり、腹を立てたりしながら、我慢、我慢でした。若い学生さんたちですから。フランスやドイツでは英語は通じないし、することがほとんどないので、暇を持て余したのでしょうか。一人となり駅で迷つてしまつたこともあります。旅は甘くありません。

—冷戦のリアルさも書き留めています。東ベルリンの検問所で団員が気軽にサンをしたあまり「日本の平和使節団が東独の壁を支持したと公表」され、「西ベルリン市長の歓迎レセプションも断わられ」た（六月二〇日記）。「女性代表8人」が日本人宅に招かれて「海苔むすびに冷そうめん」を食べた後、「ソビエトへ全員が行くかどうかについてひそひそと話し合つた」（同二二日記）。復興が進まず弾痕が生々しい国営アパート、野菜も朝から並ばないと手に入らない東

ベルリンを垣間見て、共産圏の総本山へ行くことに不安があつたのでしょうか。

**阿部** それは、良識のある人はいろいろ考えられたと思いますよ。でも、私はその他の大勢の一人ですから深くは考えてはおりません。米国では兄嫁さんらが「脂っこいものばかりでお困りでしょう」と煮しめや白あえをこしらえてくださいました。欧洲へ行ってからは食事も口に合わず、寝不足やら何やらで疲れていたんでしよう。モスクワでは証言することもなかつたと思います。

平和巡礼団の一一行は、資金不足から飛行機のチケットを清算し料金の安い列車に切り替えて六月二六日深夜モスクワに着く。駅ではソ連平和委員会や日ソ友好協会のメンバーが出迎えた（「世界の中のヒロシマ」）。

阿部の「旅日記」によると翌日は託児所を見学して「婦人平和委員会」代表と会食し、夜は四幕三時間に及ぶボリショイ・バレーを観劇。その後もロシア革命

指導者の遺体を防腐処理して赤の広場で安置・展示しているレーニン廟など組まれていた観光をこなし、ソ連人民へ証言する機会が訪れた。

「6—29　月　モスクワ　午後病院見学。一方的な説明ばかりしたのを聞いた。完全国家支払で病気は治療されていいる由。<sup>よし</sup>午後労働組合に行き、これも聞く一方の会合であつた。労組の元祖丈<sup>だけ</sup>あつて何も彼もよく管理されている。夜8時より野外音楽堂で（ゴーリキー<sup>カ</sup>樂公園〔ゴーリキイ公園〕）一般大衆向けのミーティングあり。庄野、田吉、岩永、満井氏スピーカー。終わりには4人が重複することが多いので客が散つて行つた。12時床につく」（庄野直美は広島女学院大教授、田吉チエは長崎県母子相談員、岩永兼密は福岡県で発行の夕刊紙フクニチ記者）。

「6月30日—7月1日　モスクワ　ハバロフスク　9時間飛び／ハバロ



1964年7月4日、米国から欧州、ソ連を回り、旅客船で横浜港に着いた一行。阿部は前列右端、同5人目は団長の松本卓夫さん、その左にバーバラ・レイノルズさん。（森下弘さん提供）

フスク着。7時間時差があり午前7時30分である／空港で朝食をとり日本人死没者の墓へ詣でる／ホームシックにかかり、やたらと帰国したい気になっていた時も時、この異国の地で不自由なふりよ生活を送り、はるかな日本に思ひをはせ食物も思ひにまかせず亡くなられた若いみたまに心からめい福を祈つた／暗い気持ちで又空港へ帰る。昼食後2時発ナホトカ行き特急の人となつた』

— 極東ナホトカから七月一日に日ソ定期旅客船に乗り、四日横浜港に着きます。

阿部さんは五カ国を巡りました。二カ月半に及んだ「旅日記」の締めくくりは、「丘山さんが来てくださっていた。<sup>うれ</sup>嬉しかった事、嬉しかった事、もう少しで泣くところであった」とあります。

阿部 丘山ひろみさん、東京の武蔵野音楽大の学生さんでした。歌にもなつた私の「悲しみに苦しみに」が広まつた頃、富山県から届いた被爆者への慰問品を町内会で分けると、ひろみさんの小さい時の洋服があり、娘の寸法に合うのでいただきました。お札状を出すと文通が始まり、手編みの手袋なんかも贈つていただきました。大学生になると（一九六三年に）広島を訪ねてくださり、原爆ドームをご案内しました。出発の時には羽田空港まで見送りにも来てくださいました。その後もお付き合いをいただき、優しい方でしたが三年前に亡くなられました。

—広島へは二一人が七月五日に急行「安芸」で戻ります。翌日には「市民への帰国報告集会」が平和記念館（原爆資料館東館）で開かれ、阿部さんは「家庭の主婦でもだれでも、平和のためにやろうと思えば、何かができる。またやらなきやならない」ということが分かりました」と述べています（中国新聞一九六四年八月一六日付）。東京や京都での原水禁市民大会や、地元の海田東小P.T.Aでも巡礼の写真を見せて報告したことが「旅日記」の大学ノートに残っています。解消するはずだった巡礼団は「世界平和研究会」の名称で活動を続けることを決めたと報道（同一二月二六日付）されましたが、実際はどうなったのでしょうか。

**阿部** 誘われて何回か参加しましたが、研究会は続かなかつたと記憶しています。広島の方はお医者さまとか、大学の先生とか、私には偉すぎて歯が立たなかつたですよ。でも、長崎の方とはお付き合いが続きました。旅の道中とても親密

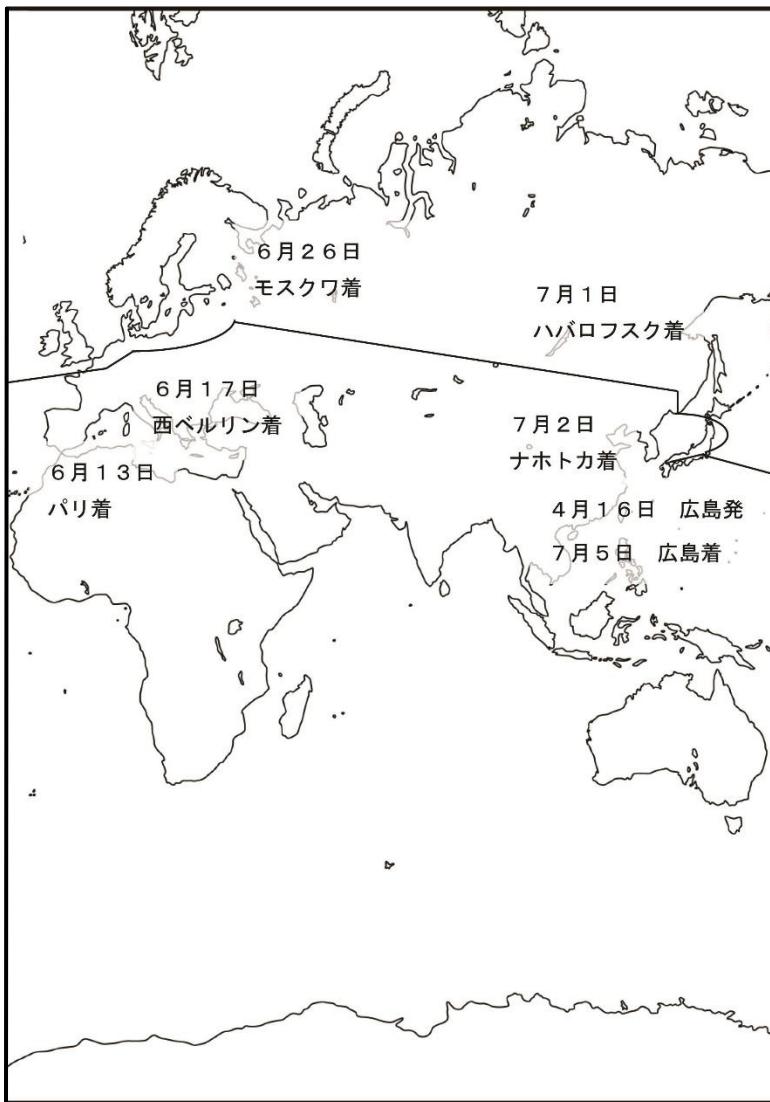
になつた田吉チエさん（当時五八歳）、高原弘子さん（同三二歳、病院ケースワーカー）、小佐々久仁子さん（同二〇歳の最年少メンバー）です。高原さんは、九州へ次男がバイク・ツーリングした時に一夜の宿をお願いしたら快く泊めてくださいました。その後も何かと気にかけてお手紙をくださいました。

小佐々さんは私の家をたびたび訪ねてくださり、子どもらとワラビ採りにも行きました。『生きていてよかつた』という映画がありましたよね（被爆者の悲痛な日々や強く生きる姿を収めた一九五六年公開の記録映画。監督は亀井文夫）。小佐々さんも写されたらしく、それを見た原田（東岷）先生から「植皮手術にお越し下さい。治療費はいただきません」という手紙を受け取ったそうです。広島とのご縁が深まって女学院大へ進まれ、広島大の先生との結婚式にもお招きいただきました。私の家へ米国の方が来られた時も通訳をしてくださいり、とてもお世話になりました。この春、久しぶりに人前でお話をした時も東広島市からわざわ

が来てくださいました。岩谷さんといいます（一一〇一四年四月一三日、WFCが開いた「世界平和巡礼60周年記念パネル展」でのギャラリートーク。翌日は九三歳となつた森下弘が証言した）。私はいろんな素晴らしい方たちとの出会いを得て、この年まで生かされてきたと思います。



地図2 「広島・長崎世界平和巡礼」  
阿部の訪問地名略図





# 4

## 被爆体験 証言者



2009年2月22日、民族対立からの内戦で荒廃したスリランカ東部の復興を担う行政官やジャーナリストに被爆体験を証言し、握手を交わす阿部。 (中国新聞撮影・提供)

原水爆禁止運動は「いかなる国の核実験にも反対する」かをめぐって社会党と共産党との路線対立が先鋭化して分裂した。一九六四年、被爆地広島では同名の二つの県被団協に分かれて今日に至る。被爆者運動も党派・労組の主導権争いに巻き込まれた中、阿部静子は証言活動に力を注いでいく。

—「世界平和巡礼」から戻った翌月の一九六四年八月五日、広島、長崎、静岡県原水爆被災三県連絡会議の原水禁大会が基町（中区）の県立体育館で開幕します。森滝市郎・広島県原水協代表委員の基調演説に続き、阿部さんによる「被爆者の訴え」など三つの特別報告がありました。原水禁運動が分裂した中で、どんな思いを抱いて証言されたのでしょうか。三県連絡会議は翌年に結成される原水爆禁止日本国民会議（社会党・総評系）の母体となります。

阿部　このような体になつたことをしつかりと自分の言葉で話し、被爆の実情を

一人でも多くの方に知つていただき。その一念でした。私は社会党だからとか共産党だからで大会に参加するのではなく、「原爆党」として証言をいたしました。原水爆の禁止を訴えるのは人間なら当たり前のことですからね。県庁勤めの主人も参加をとがめなかつたし、気にもしていませんでした。

広島や長崎で原水禁世界大会が開かれ、参加者の優しいまなざしや言葉から私は元気をもらいました。差別をなくす人間としてお付き合いをいただきました。「いかなる国の核実験にも反対する」と森滝先生たちがおっしゃったのは当然のこと。海田町原爆被害者会は分裂することはありませんでした。

—原水禁運動が混迷から停滞へと陥る中で、阿部さんは大会で証言をしておられません。一四年ぶりの統一大会となる一九七七年原水禁世界大会を前に、「運動に不信を抱き、離れていった」一人として「被爆者の心が再び踏みにじられない

い統一であつてほしい」と求めています（中国新聞一九七七年八月三日付）。

**阿部** その頃、家のことや畠仕事で忙しかったこともあります。お姑さんは、私のことは憎いんだけれど、孫はかわいがつてくださいました。いろいろありますたが同居を続けて見送りました（阿部ナエは一九六六年に七五歳で死去）。主人は子どもたちに教育をつけさせることを望み、私は自給自足で暮らせるよう農作業に努めました。教育費はかかりますからね。三人の子を大学・短大にやり、長男と次男は希望した東京の大学へ行かせてやることもできました。子どもたちが皆、家を出たり、結婚したりしてから、整形手術を受けました。ええ、原田病院です。親しくなっていた東岷先生が「阿部さん、やつてあげるよ」と手術を勧めてくださいました。

外科医の原田東岷は一九四六年に復員した広瀬町（中区）で開業。手探りで始

まつた被爆者治療を医師仲間と話し合う「土曜会」を設け、五三年の広島市原爆障害者治療対策協議会の発足にもつなげた。ケロイドに苦しむ独身女性二十五人の五五年度米治療に付き添い、六〇一七〇年代はベトナム戦争で負傷した孤児の治療支援活動も推し進めた。九九年に八七歳で死去。

—日本は「原爆乙女」、米国では「ヒロシマ・ガールズ」と呼んでいた一九五五年の渡米治療はどんな思いで見ておられましたか。まだ二八歳でした。

**阿部** ケロイドのある若い女性は、あの頃は「原爆乙女」と呼ばれていましたが、私は人妻だったので（渡米治療の募集に）手を挙げていません。米国へ渡つてケロイドが目立たないように治療を受けられ、よかつたと思いますよ。祝福しました。私は「原爆乙女」ではなく「原爆人妻」。子どもたちが家にあるのに母親が入退院を繰り返すと、どんな影響を及ぼすかと思って、三人の子が大きくなるのを

待っていました。五〇歳を過ぎても、まだ口の右下が突つ張つて、食事にも困っていた。手もこれくらいしか伸びませんでした。それで、頸の皮膚を、この口に植皮して上がるようにもしてもらつたんです。東岷先生は優しかった。優しい人が私は大好きです。

—お子さんたちが独立し、手術の後ですか、表だつて証言を再開されるのは。新聞報道をたどると、原水禁日本国民会議が一九八三年夏に開き一一カ国の海外代表も参加した原水禁大会の開会総会で「世界のどの国でも再び核の犠牲者を出してはならない」と呼びかけています。欧州の動きに刺激されて政党・労組の主導ではない市民による反核運動が高まり、八五年三月二一日の「平和のためのヒロシマ集会」（平和記念公園など市内七会場で開催、主催者発表で約五万三〇〇〇人が参加）では、竹下虎之助県知事や荒木武広島市長の激励のあいさ

つに続いて、「被爆者が生きていてよかつたと思える時は、（被爆者）援護法が制定され核兵器が廃絶された時」と訴えています。

**阿部** 私には何党だから、どこの団体だから受けるとの考えは全くございません。申しましたように「原爆党」ですから。来てくれと言われば行きますし、こちらへと求められれば参ります。被爆者の務めとして証言をしておりました。

被爆四〇年の一九八五年には、被爆者の援護事業に功労のあった人に対する厚生大臣表彰を桧垣益人らと受けた（広島被爆者関係は五〇人の計九二人）。また、日本被団協が核保有五カ国へ核兵器廃棄の国際条約締結を要請する代表団を派遣する事業では、医師の肥田舜太郎被爆者中央相談所理事長らと一〇月一九日フランスへ向けて成田空港から飛び立った。

—広島を訪れる修学旅行生への証言活動は、どんなきっかけから取り組まれていったのでしょうか。

阿部 高橋（昭博）さん（広島市立中二年の時に中広町の校庭で被爆。市職員となり一九七九一八三年原爆資料館長。二〇一一年に八〇歳で死去）に頼まれたんです。何でも「東京・板橋区から修学旅行生を広島へ送ることになり、被爆者がどんな話をするのかを聞いてみようと保護者たちが来る。僕一人じや心細いから阿部さんもやってよ」



2001年3月10日、原爆資料館で開かれた広島、長崎、沖縄からの若者らによる学習交流会で被爆体験を語る左から阿部と高橋昭博さん。  
(中国新聞撮影・提供)

と頼まれ、広島市内の小さな宿の広間で話をしました。正確な年は覚えていませんが、私が修学旅行生に証言を始めるきっかけでした。高橋さんは（一九五六年の）「国会請願」に参加されて昔から知つておりました。

東京都公立中学校の広島修学旅行は、山陽新幹線が広島へ開通した一九七五年に日野市立七生中が実施。それを知った葛飾区・上平井中教諭の江口保は翌年から取り組み、平和記念公園内外の碑前での証言を組み込んだ「上平井方式」を広げていく（二〇一二年発行『複数のヒロシマ』）。江口は八六年から広島に住み、全国からの修学旅行を支援した。九八年に六九歳で死去。

—長崎の被爆者でもあつた江口さんの求めには応じられましたか。

阿部 江口先生からは何度もお誘いをいただきました。ただ、どうしても外での

証言になるんですよ。平和記念公園にも酔っ払いなんかがいて、私が証言しようとするとやじる。それが嫌で、お断りするようになりました。原爆資料館であれば、部屋でじっくり聞いていただけるし、夏冬は冷暖房がありますから。

一市の財団広島平和文化センターが当時こう呼んでいた「被爆体験講話講師」を、昭和から平成となつた一九八九年に引き受けています。当時は一二一人でした。原水禁大会で証言をしていて、すんなり「講師」になれたのでしょうか。

阿部 どなたが決めるのか、役所のことは分かりませんが、高橋さんが推薦したんだと思います（高橋昭博は資料館長から平和文化センター事業部長に就いていた）。「阿部さん、やらんかね」と頼まれました。「どうしても都合がつかんから代わりに行つてくれ」ということもありました。新聞・テレビで有名な高橋さんでしたが、私を立ててくださいましたね。

—広島市長が会長を務める第二回世界平和連帯都市市長会議（現在は平和首長會議）の参加者や、国連軍縮京都會議で来日した二五カ国の軍縮担当者にも証言をしますが、「被爆体験講話講師」は一九九一年に退いています。

阿部 平成になつて、主人に胃がんが見つかって手術となり、退院後も手があかなかつたんです。県庁を退職してからは、畠仕事に精を出し、好きだつた俳句に打ち込みました。全国大会で入選もしました。俳号「斗志」と同じ名の「斗志会」という、主人が会長をしていた戦友会（第八師団野砲兵第八連隊第九中隊の関係者で一九八〇年に結成）に晩年は私を何度か連れて行つてくれました。南洋の孤島から生きて帰つてこられた方たちが男泣きしておられるのを見て、よっぽどつらい思いをされたんだろうなと感じました。原爆で顔に傷を抱える私が出席したことで次からは、目が見えなかつたり、片足を失つたりした奥さんも来られるよ



1970年代、夫の阿部三郎と海田町砂走の阿部家墓前で。  
大力家の墓とともに生家近くの山裾に移設した。

うになりました。亡くなる年も山形県であつた戦友会へ無理して出席しました。私は体調が悪く、娘が付き添つて行つたのが、あの写真です。主人は私の活動を誇りに思い支えてくれて、最期まで大事にしてくれたと思っています。

阿部三郎は一九九二年八月三〇日、七三歳で死去した。妻静子が入居する「八景園」の居室は、最後となつた戦友会への旅で長女と収まる写真

や、カラーハ化した婚礼写真を飾る。二〇〇三年発行の会報『斗志の辯』一〇〇号記念誌へは長男が亡き父の句作を選んで寄せていた。

戦陣の飢餓の思ひで日照り草

ヒロシマ忌死者の眼窩のみひらきて

—古希を過ぎて、修学旅行生への証言活動は本格化しています。一九九九年に平和文化センターの「被爆体験証言者」を委嘱され、八〇歳代に入つても精力的に続けられました。何が原動力になつたのでしょうか。

阿部 うーん、私はね、何と言うこともないんですが、修学旅行生たちの目が一生懸命に私を見て、聞いてくださる。この人たちにはかわいいま、美しいまま、肌を傷つけないで一生を過ごしてもらいたい。そうした思い、一念で話しておりました。私の傷を見て、原爆・核兵器がいかに恐ろしいものなのか、なくさなく

てはいけないのかを実感していただきたい。そういう気持ちもございました。無我夢中でやつておりました。

—『原爆に生きて』で表された、辛酸をなめた日々は話さないのでですか。

阿部 八月六のことだけです。修学旅行生への証言はだいたい一時間内ですし、子どもですからね。学校でいじめたり、もましたり、そういうことはよくない、やめようとも伝えました。反応ですか？ 言いつ放し聞きつ放しで終わつたような時もあります。でも、お手紙が来ると必ず返事を出しました。いつも受け止めたようなことが書かれていたからです。手応えを感じておりました。それで連絡があれば、勇んで出かけて証言をさせてもらいました。

こんなこともありましたよ。ある中学校の校長先生が「来年の今夜もこの旅館に来ますから阿部さんお願ひします」と言わされて、新しい年のカレンダーにも書

き込んで待っていたのに何の音沙汰もない。別の二校から依頼を受けたら、当日になつて「うちちは昨年から頼んでいた」と連絡がありました。一日で三回、重たい話をする羽目になりました。軽く扱われているなあ、とも思いました。それでも五月と一〇月は毎日のように、お誘いがあつて、行かせてもらいました。それでますます育てられました。

——育てられた、というのは。

**阿部** 最初の頃は壇上から降りると、あれを話せばよかつた、これを話すべきだつたと反省しきりでした。でも回数を重ねるにつれて自信がついて、原稿なしで一時間お話しできるようになりました。

——一口に被爆体験といつても、原爆に遭った場所や年齢、その後の生き方でも一

人一人違いますが、自分の言葉で語る、伝えられるようになつた、と。

阿部　はい。原爆証言では、ちよつと自信を持つようになりましたね。

—南米エクアドルの大統領や  
イラク、アフリカ・ウガンダ  
の外相、二〇一〇年には政府  
の「非核特使」として、広島  
を訪れた国連総会議長を務



2010年9月7日、外国元首で初めて国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を訪れたエクアドルのラファエル・コレア大統領に被爆証言をした阿部。  
(中国新聞撮影・提供)

める元スイス大統領にも証言をしています。修学旅行生とは違いましたか。

**阿部** 大差はございません。私が身に受けたこと、私が思つたことをお伝えしております。子どもたち、学生さん、指導者へも変わりなく話しております。通訳を介しても、やはりわざわざ広島へ来られて、話を聴こうという指導者はとても熱心に平和を求めておられました。お話ししてよかったです。名誉に思いました。

—大学生には「広島・長崎講座」に呼応して早稲田大が二〇〇三年に設けた「21世紀世界の平和とは」で当時の秋葉忠利市長と講師を務め証言しています。

**阿部** 市長さんが先に話して、私が後からさせてもらつて。あれは覚えとります。

大学の講義はちょっと長いですし、三〇〇人もの学生さんがいたので、私も勉強になりました。明治学院大の先生は（キヤンバスがある）横浜へ何度も呼んでくださいり、留学生と一緒に広島へ来られるたびにも声をかけていただきました。私

ががんを患つてやめている間も、証言は可能かどうか、うかがつてくださつて、この「八景園」へも訪ねてくださいました。

「非核特使」は、二〇一〇年の広島平和記念式典と長崎平和祈念式典に参列した菅直人首相が、被爆者が「国際的な場面で核兵器使用の悲惨さや非人道性を世界に発信していただけるようにしたい」と述べたのを受け、外務省が一〇年から自治体や平和団体の申請により名称を付与して核軍縮関連業務を委嘱した。

「広島・長崎講座」は両都市が被爆者の訴えや核兵器の非人道性を学術的に扱う講座の開設を二〇〇二年度から大学に呼びかけ、被爆関連資料なども提供する。二四年度現在、国内五三校・海外二五校を認定している。

――証言活動は広島のメディアでよく取り上げられます。――自身が話される内容や

姿をテレビで見て、どんなふうに思つていましたか。

阿部 特にないです。傷だらけの者が出とるんですから。

一では、ご家族の反応は。

阿部 子どもたちはね、活動を応援してくれました。修学旅行で、この前G7があつたホテルへ何回も呼んでくださる学校があるんです（二〇一二年の先進七力国首脳会議＝G7広島サミット＝は南区元宇品町のグランドプリンスホテル広島が主会場となつた）。あそこは交通の便が悪いんです。証言が夜になると帰るのが大変でした。タクシーで街中まで出て、電車かバスを使つたり、広島駅でJRに乗り換えたりして、またタクシーで（安芸郡海田町の）家へ帰るわけです。隣に住む次男が送り迎えしてくれて本当に助かりました。

—海田町原爆被害者会の会長を夫の三郎さんが亡くなつた三年後、被爆五〇年の一九九五年に引き受けています。

阿部 県被団協の理事も務めましたが、会議にみえるのは、各地域のほとんどが男性の会長さんです。私の発言は一言で終わつたように思います。若い頃に差別され馬鹿にされ、傷を負つた顔で暮らしてきました。自分のことをあんまり評価しておりません。長年お付き合いをいただいた、伊藤サカエさんや、池田精子さん（広島女子商一年の時に鶴見橋近くで被爆。一九五六年の「国会請願」を共にした）のようにはいきません。先頭に立つたり、臆せずに行動したりする、活発な人間にはなれませんでしたね。

伊藤サカエは建物疎開作業に動員された鶴見橋のたもとで被爆。一九五六年の広島県被団協結成時から理事を務め、安芸郡矢野町議なども歴任した。八一年女



1999年1月20日、広島県被団協代表者会議に続いてメルパルク広島で行われた伊藤サカエ理事長（前列右）の米寿を祝う会で。左端が阿部、左から4人目は近藤幸四郎さん。右端は高橋昭博さん、右から2人目は坪井直さん。

性で初めて日本被団協代表委員となり、最期まで続ける。「国は原爆死没者に線香の一本でもいいから供え、悪かつたといってほしい」と国家補償に基づく被爆者援護法の実現を求めた。二〇〇〇年に八八歳で死去。

しかし、阿部さんは広島県、日本被団協結成に参加した被爆者運動を切りひらいた一人ですよね。いわば後輩の男性陣に

遠慮しなくとも、いいのでは。

阿部 まあ、そうではありますけれど、私はあの、何というか、自分を卑下しておりますから大それたことは考えておりません。被団協を引退しておりましたが、結成六〇年の時に坪井直さん（広島工専三年の時に富士見町で被爆。中学校長を退職後の九三年県被団協事務局に入り、二〇〇四年理事長、一〇年からは日本被団協代表委員を務め二〇一二年に九六歳で死去）から表彰していただきました。お手紙も賀状もくださるし、癒やされておりました。

県被団協が二〇〇一年に初めて編んだ『核兵器のない明日を願つて－広島県被団協の歩み』は、阿部や池田精子、近藤幸四郎（修道中一年の時に皆実町で被爆。七四年に地域・職域の原爆被害者会をつなぐ被爆者団体連絡会議をつくり手弁当で事務局長を務める。二〇〇一年に六九歳で死去）、高橋昭博ら六人が、事務局長

だつた坪井直の司会で「苦難の日々」から「ヒロシマの世界化」までを座談会で語つている。阿部は一六年に県被団協「功労者」として表彰された。

—海田町原爆被害者会は、二〇〇一年時でも「県内では会員数最大の組織」約一〇〇人だつたのが、〇七年に解散しています。全国の被爆者の平均年齢は、今と比べるとまだ年少の七四・五九歳でした（厚生労働省調べ。二〇一四年は八五・五八歳）。何が一番の理由だつたのでしょうか。

**阿部** 私の耳が遠くなり、今のように性能のよい補聴器もございません。県被団協の会議に出ても皆さんにきちんと報告するのが難しくなりました。ほかの方に会長さんをしていただこうと思つたんですが、ペースメーカーを入れられたり、人工肛門になつたりして、引き受ける人がおりません。代わつてやろうという人も出てこない。私どもの力不足で解散となつたしだと思います。

—会員数がもともと少ない他県の被団協では「被爆二世」に参加してもらうケースもみられますが、会としての活動継続は考えられなかつたのでしょうか。

阿部　相談はしました。一世は被爆者への差別を肌身で知つてゐるだけに「子どもにまでそういう目に遭わせたくない」、それが皆さんのご意見でした。私の息子や娘は幼い頃、「赤鬼」と言われた私のこの顔の傷のことでいじめられました。証言活動は応援してくれますが、原爆のことを私に代わつて背負おうとは思つてはいないでしよう。二世の方たちに苦労をかけたくはありません。

被爆者への援護でいえば、一世だけで十分にやつてきたんじゃないでしょうか。原爆の惨禍のこと、核兵器のことは、私たち体験者が証言をいろんなところで続け、だいぶ知恵を絞つて行動もして、たくさんの種をまいたと思つております。

その種が育つて、あの条約（核兵器禁止条約）もできたと思つています。核兵器



2011年6月13日、原爆資料館南側の緑地帯でバーバラ・レイノルズさんの記念碑を除幕する阿部（前列右から5人目）や森下弘さん（同4人目）、長女ジェシカさん（同右端）。

は要らない、あつてはならない。世界の多くの皆さんのが普通に口にするようになつたと思つています。

核兵器の製造・保有・使用などを禁止する核兵器禁止条約は、一二二カ国・地域が賛成して二〇一七年に成立し、批准が五〇カ国・地域に達した二一年に発効した。条約前文は「ヒバクシャ（被爆者）の苦しみと被害」に言及する。二四年九月現在、九四カ国・地域が署名しているが、核保有国や日本はしていない。



# 5

## 生きていて よかつた



日本被団協結成から 50 年の 2006 年、平和記念公園で語り合う阿部（左）と高野（村戸）由子さん。村戸さんは 1955 年の第 1 回原水禁世界大会で証言し、「生きていてよかった」の言葉が思わず口を突いて出た。阿部の詩の一節とともに 2 人の思いは日本被団協の結成大会宣言に盛り込まれた。高野さんは 2022 年 9 月 21 日に 90 歳で死去。（中国新聞撮影・提供）

阿部静子は二〇二四年二月二二日に九七歳となつた。胃がんや転移も乗り越えて広島市南区の老人ホーム「八景園」で暮らしている。五階の自室で新聞を毎日読み、年に一〇〇通を超す手紙を送る。体力はめつきり衰えたが、ヒロシマをめぐる記憶は鮮明だ。

—広島平和文化センターが委嘱する「被爆体験証言者」を続けていたのに二〇一三年に退いています。八六歳だったとはいえ、何があつたのでしょうか。

阿部　一番は胃がんとなつたからです。かかりつけ医の先生に「緊急入院です」と言われた時は、三日後に証言の約束をしておりました。センターに電話をしたら、応対に出た職員さんがご苦労さまの一言もなく、代わりはいくらでもいますからという言葉でした。それで心が冷えたわけです。私は平和文化センター道具だつたんだなあとthoughtいました。先生が広島大の出身だったので大学病院を紹介

していただき、放射線治療と抗がん剤で診てもらいました。三ヶ月くらいかかりましたでしょうか。退院してからは隣に住む次男一家に支えられてしばらくは自宅で暮らしておりました。

—退院後にセンターから証言者としての求めはなかつたのですか。

**阿部** 海田町の端から通うのは、自宅から出て、芸陽バスで四〇分あまりかけてバスセンターに着いて、そこから徒歩で参ります。原爆資料館や（国立広島原爆死没者）追悼平和祈念館で約一時間証言して、また同じ道を帰る。とても体力が持ちません。根気もなくなりました。辞めるかどうか、お尋ねもなかつたんですが、自分で決めて辞めました。すっぱりと引退しました。

—被爆地広島が二〇一六年五月二七日に受ける原爆を投じた米国の現職大統領の

初訪問、当時のバラク・オバマ大統領が来日する前から、トルーマン元大統領と会つたこともある被爆者として、新聞・放送局から取材を求められていました。どんな思いを抱かれていたのか、あらためておうかがいします。

阿部 なんか私たちの味方が来てくださると親近感を持つていました。「オバマさん、ようこそ広島へ」という気持ちでお迎えしました。私は出かける体力はないので、当日は自宅にＮＨＫのテレビ中継の方たちが来られました。原爆慰靈碑に献花をする姿を見て、好意的に受け止めた返事をいたしました。もう少し原爆資料館を時間を割いて見ていただきたかった、という気持ちもありましたね。まあ、ありました意見ではあります。

—メディアを通じての証言を見なくなつたと思っていたら、こんな記事を見つけました。「八景園」の入居者一三人が南区の仁保公民館で歌声を披露した「笑顔

も奏でるコーラス隊」との見出し記事で、「また外部の人に歌を聞かせたい」と阿部さんの談話が載っていました（中国新聞二〇一八年一月一三日付）。

**阿部** この「八景園」へはコーラス隊で歌つた前の年に入つたように思います（二〇一七年七月二七日入居）。ここへ来ても（南区霞にある）広島大病院へ五〇回くらい通いました。がんが十二指腸に転移したと言われて。今度は抗がん剤だけで治療してもらいました。

—被爆者にがんの発症率が高いのは放射線後障害研究からもよく言われていますが、不安は大きかったのです。

**阿部** もうおしまいじやろうと思いました。でも、子どもらやお友達から「胃がんの人は皆、元気になつているよ」と言われ、そうかもと思つて。私は生き死には仏さまにお任せしております。お任せですから心配はしておりません。うちに

いたときは一冬に三回は大風邪をひいたりました。子どもらが慌てるようなことがあつたんです。ここに来てからは風邪をひいていません。食事の栄養バランスがいいんです。おいしいことはありませんが。介護士さんも、いい人ばかり。ありがたいと思いながら過ぎさせてもらつております。

三人の子どもたちはよくしてくれます。滋賀県にいる長男は年に五回は来てくれます。猛暑続きのこの前も帰つて来て、皆さん（聞き書き編者）へ渡してくれと紙をね、置いていきました。参考にしてやつてください。「国会請願」に連れて行つた次男は夫婦でよく来てくれます。私が出たテレビ番組も録画して残してくれとります。娘は一週間に二回は来て、あれやこれや世話をやいてくれます。この前は「お母さん、出る杭くいは打たれる。ここではおとなしくして」と言うので「どうして」と聞くと、「またテレビや新聞に出どる」と申しました。親子で話し合いました。「ほとばしる、やむにやまれぬ気持ちを伝える。こういう仕方で生きるの

が私の宿命よ」と言いました。

「広島・長崎世界平和巡礼」六〇年の二〇二四年四月、バーバラ・レイノルズらが創設したワールド・フレンドシップ・センター（WFC）が主催した記念イベントで証言し、メディアは被爆者阿部静子に再び注目する。「八景園」の自室フレンダーは夏にかけて、ミニ特集番組をつくるNHKや広島テレビ、各新聞・通信社の訪問取材予定日で埋まった。八月六日は「被爆者の声を世界へ」と題しWFCが中区のJMSアステールプラザ大広間で開いた講演会へ出向いた。

一八月六日に被爆体験を一〇数年ぶりに海外からの若い人を含めて大勢の前で証言されました。やはり気持ちは違いましたか。

阿部 違います。原爆の日に広島へ集まる人は、反核への熱い気持ちを持つてお



1990 年代前半、安芸郡海田町砂走の自宅にそろった 3 人の子らと。右から長女の千恵子、阿部、長男の年雄、次男の比路志夫夫妻。前列の子どもは次男の娘。

られます。とても温かいまなざしで愛でてくださる。証言した私が元気をいただきましたよ。英語の人たちには通訳がありました。が、一時間ちょっとでは十分にお話しできず、生煮えのようで申し訳なかつたです。

—会場には、小学生のひ孫さんらも来ていましたね。

阿部 妻) はい。うちの嫁さん（次男）が「夏休みですし、孫を連れ

てうかがいます。話は分からなくとも、核兵器反対の運動を続けてきたお母さんの姿をまなこに残してやりたい」と言つてくれて。一番前に座つて聞いてくれたのもうれしかつたですよ。中学生のひ孫は塾で忙しいんですが、小学校の授業で原爆のことを聞いて、「おばあちゃんがおおやけどし、証言活動をしている」と手を挙げたそうです。先生が「見たい」とおっしゃり、次男が編集した私の証言映像を学校へ持つていくと、隣の教室もその隣の教室でも見てくださつた。原爆の傷は自慢にはならんのに、ひ孫は恥ずかしいとは思わず、私が生き延びてくれたからと感謝の思いも次男夫婦に話したそうです。それを聞いて私は泣きました（阿部のひ孫は一二人を数える）。

こうして長生きしているのも、やつぱり亡くなつた人たちが守つてくださり、「もっと伝えよう、伝えよう」と後押ししてくださつたから、今があると思っています。証言の機会をいただき、一言、一言疎かにできないと思つて、この前

WFCの会へも出させていただきました。

—被爆体験を次世代が受け継ぎ伝える「被爆体験伝承者」の養成が続いています  
が、どう見ておられますか。

阿部 伝承者が伝えようとする心は尊いし、ありがたいと思っています。被爆者  
を思われる姿勢は尊敬し感謝しとるんですが、われわれのような熱意までは伝わ  
らんのではないかという心配もしております。

広島市は「被爆体験証言者」の体験や思いを伝える「被爆体験伝承者」の養成  
を二〇一二年度に開始。希望者は証言者から聞いた体験を原稿にまとめるなど二  
年間の研修を積み、平和文化センターの委嘱により原爆資料館での定時講話や外  
部の依頼に応じて講話をしている。二四年四月現在二二六人が登録。

阿部 普通の涙じやないですよ。この顔でね、生きていいこうと思つたら。九七歳まで生きてしまつたけれど死んでも治りそうにありません。原爆の傷もつてね、死ぬまでこの顔でね、生きるというのは、自分がこういう傷で生きてみないと分かりません。だから、誰にも私のようになつてほしくないと願い、証言をしてきました。（原爆資料館長だった）高橋（昭博）さんも「話しても分からんよ、でも話さんと分からん」とよくおっしゃっていました。原爆のこと 등을伝えるというのは本当に難しいですよ。

—被爆者は、原水爆の禁止から核兵器廃絶まで国家の側でなく被害に遭う人間の側に立つて訴えてきました。日本被団協の初代事務局長を務めた藤居平一さんは「救われる者が救う」と直筆ノートに書き残していました（広島県立文書館所蔵）。しかし、核兵器は世界に広がり、使用の可能性を公然と口にする指導者、

国家も続く現実世界をどう思っていますか。

阿部 広島への原子爆弾は今と比べると幼稚だつたといわれていますが、あの中  
にいた者にとつては、地獄でもこんなことはないだろうと思うくらいのものでし  
た。原爆よりもっと精巧、強力にできている核兵器がこの世にある、使うという  
のは被爆者としてとても許すことはできません。ぜひぜひ、やめてほしい。核兵  
器がひとたび使われたら人類滅亡です。核兵器に関心がなかつたり、その力を頼  
つたりする人は、自分が人類つて思つておられないでは、他人ごとだと思つて  
おられるのではないでしようか。原爆や核兵器の被害を自分ごと、自分の親とか  
子や孫に例えて受け止めていたら、もっと熱心に取り組んでいただけるん  
じやないか、平和な世の中になると思つております。

—この前、被爆者は「たくさん種をまいた」とおっしゃいました（154ページ参照）。

種は花を咲かせる、実をつけると信じておられますか。

阿部　はい。あの頃の平和大会（原水禁世界大会）から八月六日に広島へ集まる人たちや、修学旅行で来られ、私どもの証言を聞いてくださる方たちを見て、そう思っています。この前は富山県高岡市から、リタイアされたんですけど中学校の先生が私を捜して訪ねてこられました。富山からの学校にはよく証言をさせてもらいました。その方が言われるには、「主人が難病になられた時に私が励ましの手紙を送ったそうです。忘れておりました。「それがうれしくて学校を辞めずに働き続けて、夫にも優しくして見送りました」とお礼に来られました。私もうれしかったですよ。人に優しくするのが、やっぱり平和の一粒じやないでしょうかね。心からそう思つります。

—長期間にわたってお話をうかがわせていただき、本当にありがとうございます。

今回の証言をまとめ、図書館などへ贈る本の副題は、あの詩の一節から「悲しみに苦しみに 生きていてよかつた」を取りたいと考へています。

**阿部**　ここでは金曜日に二週間に一回の健診があるんです。この間、(近くにある)厚生病院の院長さんが私に「阿部さんは今まで生きてきた中でいつが幸せですか」という質問があつたので、「今です」と答えました。そしたら院長さんが「そう言われるだらうと私も思つていた」とおっしゃいました。私の生き方が皆さんに幸せに見えるんじやと思つてね、感謝しております。皆さんに私の被爆体験や生き方を知つていただけたら、ありがとうございます。

二〇二四年のノーベル平和賞を日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）に授与すると一〇月一一日、ノルウェーのノーベル賞委員会が発表した。「核兵器のない世界を実現するための努力」「核兵器が二度と使われてはならないことを証言

を通じて示してきた」。阿部静子をあらためて「八景園」に訪ねた。

阿部 うれしかったです。今までのことを思い出して涙が出ました。部屋で泣きました。被団協がいただいたいことは、功績が認められたんでしょうが、これからのは責任も重いなあと思いました。賞は、やっぱり先人のおかげです。家業をなげうつて私どものために立ち上がられた藤居（平一）先生、「アカ」呼ばわりされながら被爆者のお世話をされた桧垣（益人）先生、運動を引っ張つて核兵器の廃絶を訴えられた森滝（市郎）先生、この前亡くなられた、ほら、あの、坪井（直）さん、皆さんのご苦労を思い出しました。

—阿部さんは、まさに先人と一緒に頑張つてこられた一人じゃないですか。

阿部 ええ、まあ、私は大した働きはしておりません。こんな顔で生きてきたの

で自分に自信がありません。だからね、被爆者として喜ぶばかりじゃなしに、責任を考えました。大きな賞ですから。

——一日のノーベル平和賞発表はどのように知りましたか。

阿部 夕方この部屋でNHKのテレビ・ニュースを見ていたら、今の理事長さんが「本当か?」と頬をつねつて喜ばれているのを見て知りました（広島県被団協の箕牧智之理事長が受賞に備えて広島市政記者室で高校生平和大使三人と待機していた）。私も被団協を引退する前は、事務所（中区大手町の県被団協が入る平和会館）で発表を待つことがあります。二〇年前くらいだつたでしょうか。たくさんのカメラに囲まれましたが、池田（精子）さんらと肩を落として帰つたことを覚えどります。ノーベル平和賞は長年の念願でした（池田精子は二〇一四年一二月二〇日に九二歳で死去）。

日本被団協は「ふたたび被爆者をつくるな」と一九八五年、被爆者代表団を国連常任理事国でもある核保有五カ国に派遣し（阿部静子はフランスへの代表団の一人）、同年に初めてノーベル平和賞に推される。それ以降も推薦が続き、被爆六〇年の二〇〇五年には期待が高まつたが、国際原子力機関（IAEA）とモハメド・エルバラダイ事務局長が、二〇一七年には核兵器禁止条約の制定に貢献した核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）が受賞した。

—受賞の知らせの後は、お祝いの電話で大変だつたのでは。

**阿部** あくる日は、二二の皆さんが集まる部屋へ行くと「おめでとう」「よかつたね」と声をかけてくださいました。お年を召されていても私の活動をご存じでした。長男の年雄は滋賀県におりますが、「方々からお祝いの言葉をいただいた」と

連絡してきました。母親が原爆の証言活動をしてきたことを知つておられたんですね。海田町に住む次男の比路志も朝にお祝いの電話をくれました。南区にいる娘の千恵子はいつも一人で来るんですが婿（長女の夫）も一緒にねぎらってくれました。あれらも、いつか申しましたように、子どもの頃は私が（ケロイドの）赤い顔で授業参観に行くので肩身の狭い思いをしましたからねえ。喜んでくれました。力強い声で心を込めてしよられるのをテレビでこの前も見た（「被爆体験証言者」の）梶本淑子さんからはお手紙をいただきました。マスコミの方も次々来られて。タベ（一〇月一六日）は、この部屋で転んでしまい、夜勤の人がドーンという音で気づいてくれてベッドに引き上げてもらいました。大したことにならずよかつたですよ。

—受賞発表を機に「責任を考えた」と言われましたが、これからも果たそうとあ

らためて誓われたのでしょうか。

阿部 もう九七歳です。覚悟をしながら一日一日を、舟を漕ぐように生きとります。自分で責任を果たせないから悔しいんです。活動に打ち込もうにもできんから悲しいんです。被爆者の心をいかに若い人たちに託すか。年寄りの被爆者も力を奮い起こす。それが責任だと思っています。個人としてはささやかであっても伝えていこうと思つります。昨日も新聞社の若い記者さんが被団協のことを一から聞いてくださいました。

—広島県内最大の会員数だった海田町原爆被害者会の解散を会長として決断するに当たつて、「自身のお子さんを含めて「被爆二世」に背負わせる気持ちはない」と話されました。日本被団協の受賞でお気持ちは変わりましたか。

阿部 そこが矛盾しとるところです。原爆でむごい目に遭い、私は心も傷ついて

泣いて泣いて暮らしました。「被爆二世」ということになると遺伝とか、そういうイメージが絡んで、その子どもたちも傷つきます。利己的でしようか。被爆が原因する差別やいじめは自分らだけで十分だと思っています。

一九五六年結成の日本被団協は、かつては四七都道府県に加盟団体があつたが、被爆者の平均年齢が八五歳を超す中で、二〇一二年度に石川県原爆被災者の会が解散するなど現在一一団体が解散・休止にある。広島県でも活動を終える団体が増えて県被団協を構成するのは約三〇団体に減っている。

一広島県被団協から日本被団協の結成大会に参加された一人として、「被爆者のよ  
りどころ」とおっしゃられた組織の今後をどう見てしますか。

阿部　被爆者はどんどんいなくなつても（二〇二四年七月現在、全国の被爆者は

一〇万六八二五人、うち広島県内は五万一二七五人となつた)、被爆した事実、原爆で数え切れない人が死んだ、苦しんだ事実は変わりません。私は悲しみのどん底にいたとき、あの原水禁世界大会で広島へ集まつた人たちに慰められ、励されました。人としての心を持つた方たちです。被団協の活動は、核兵器のない、戦争のない世界に向けて行動する有志を入れてやつていただきたいという願望を持っています。このノーベル平和賞で燃え上がる若い人たちがいます。信じております。私がいるこの部屋から声援を送りたいと思っています。

## 阿部 静子 略年譜

（この略年譜は、本人や家族の提供記録や、被爆者運動・原水爆禁止運動の各関係資料、中国新聞記事などを基に作成したものである）

### 一九二七（昭和二）年 当歳

広島県安芸郡奥海田村（現在の海田町）に、農業大力万吉、ツ子の五女として二月二三日に生まれる。兄三人、姉四人の八人きょうだいの末っ子、七歳違いの四女は早世していた。

### 一九三三（昭和八）年 六歳

奥海田小学校（海田東小学校）に入学。

### 一九三九（昭和十四）年 一二歳

奥海田小学校尋常科を卒業し、広島市西白島町の安田高等女学校（安田女子中・高校）に入学。山陽本線安芸中野駅から列車通学を続ける。

## 一九四一（昭和一六）年 一四歳

日本が一二月八日、米英と開戦。

## 一九四三（昭和一八）年 一六歳

安田高等女学校を卒業し、広島市国泰寺町にあつた「土井田高等洋裁女学校」に入学。

阿部三郎と結婚。九歳年上の三郎は山形県最上川流域の北村郡山郡龜井田村（現在の大石田町）の出身で大阪で育つ。満州牡丹江省（現在の中国黒竜江省）に駐屯する第八師団野砲第八連隊第九中隊に所属する中尉だった。一時帰国して安芸郡矢野町の親族を訪ねたことから見合いとなつた。夫の部隊復帰で新婚生活は一週間に。

## 一九四四年（昭和一九）年 一七歳

実家近く安芸郡中野村の借家に阿部三郎の母ナユと住み、海田市町（海田町）にあつた第一一海軍航空廠で働く。三郎が中隊長だった第九中隊は一月に南方派遣の命令を受けて三月、西太平洋サイパン島経由でカロリン諸島エンダービー島に上陸。連絡は途絶える。

## 一九四五(昭和二〇)年 一八歳

八月六日、広島市の第六次建物疎開作業に伴い「中野村国民義勇隊」として京橋川西側の平塚町(中区東平塚町、鶴見町などの一帯)へ出動して原爆に遭い、顔や腕に大やけどを負つて安芸郡船越町の日本製鋼所広島製作所まで避難した。九日、父万吉が同製作所で見つけてリヤカーで連れ帰る。

一二月三〇日 阿部三郎が静子の実家を目指して復員。

## 一九四六(昭和二一)年 一九歳

広島市宇品町の日本医療団宇品病院(県立広島病院)へ両親の支援で半年間入院し、右手指への植皮手術を受ける。

長男年雄を出産。連合国軍総司令部(GHQ)の公職追放指令から、除隊時は大尉だった三郎は、静子実家の大力の親族が営む材木店で働く。

## 一九四七(昭和二二)年 二〇歳

奥海田村に進駐軍通訳の長兄が入手した材木で自宅を建てる。

## 一九四九（昭和二四）年 二二歳

次男比路志を出産。

## 一九五二（昭和二七）年 二五歳

「原爆被害者の会」が八月一〇日発足。「原爆一号」と呼ばれた吉川清が妻生美と原爆ドームそばで営む土産物店で開く集まりを訪ねるようになる。

奥海田村が東海田町となる。

## 一九五三年（昭和二八）年 二六歳

『原爆に生きて』を編さんする山代巴へ自らの体験をつづった手紙を送り、「えり子」という匿名の「友の手紙」として収録される。三一書房から六月二二五日発行。

## 一九五四（昭和二九）年 二七歳

長女千恵子を出産。

## 一九五五（昭和三〇）年 二八歳

八月六日、第一回原水爆禁止世界大会が広島市の平和記念公園にあつた市公会堂で開幕し、参加する。九月一九日、原水爆禁止日本協議会が発足。

三郎が県職員に採用される。

## 一九五六（昭和三一）年 二九歳

三月一九日 広島県原水協幹事の藤居平一を団長に広島の原爆被害者代表団が治療費の国庫負担や原水爆実験禁止を求めて広島駅を出発。阿部は次男の手を引いて急行「安芸」に乗車した。翌二〇日、長崎、宮城、長野県などの代表とともに衆参両院議長に請願。二一日、広島の国会請願団は地元出身の大蔵大臣・池田勇人を新宿区の自宅に訪ねる。続いて、首相鳩山一郎邸で妻薰と面会し、阿部が代表して願いのあいさつを述べる。

五月二七日 広島県原爆被害者団体協議会の結成総会が基町の広島Y M C A講堂で開

かれ、県下各団体約六〇〇〇人の代表者約一二〇人、長崎八人、愛媛一人が参加。

七月一日

「原・水爆禁止の願いこめ」「被害者の作詞した歌」と阿部が国会請願から帰途の列車内で作った詩「悲しみに苦しみに」が中国新聞で紹介される。

七月一八日

安芸郡原爆被害者団体連合会が広島市に統いて結成。原爆で妻子を失った桧垣益人（東海田町）が会長に就き、副会長に伊藤サカエ（矢野町）ら。安

芸郡内の原爆被害者は四六〇〇人を超える、二八〇〇人が新会員として入会。海田町原爆被害者会が設立。桧垣が一九五四年ごろから町内を訪ね歩いて

結成を説き、阿部も協力して回った。設立時の会員は二三四人。一九六九年には一五〇〇人となる。

八月七日

広島県原爆被害者大会が市公会堂で開かれ、約五〇〇人が参加。阿部が「原爆被害者に対する国家補償」などの提案文を読み上げ、「私たち生き残つ

たものが、強く生きぬくために、お互いに、助け合い、手を握つてやりましょう」と呼びかける。

八月一〇日

日本原水爆被害者団体協議会が結成。第二回原水禁世界大会があつた長崎国際文化会館に約八〇〇人が集まる。「悲しみに苦しみに」が会場で歌われる。

一一月一九日

「広島のうたごえ」大会が基町の児童文化会館で開かれ、「悲しみに苦しみに」が歌われる。作曲は広島合唱団を指導していた村中好穂。

海田市町と東海田町が合併して海田町に。

## 一九五七(昭和三二)年 三〇歳

原子爆弾被爆者の医療等に関する法律(原爆医療法)が四月一日施行。

## 一九六〇(昭和三五)年 三三歳

被爆者健康手帳を広島県から交付される。

## 一九六三（昭和三八）年 三六歳

原水爆禁止運動が「いかなる国の核実験にも反対する」かの賛否をめぐって社会党と共産党との路線対立が激しくなり、日本原水協は分裂する。

## 一九六四（昭和三九）年 三七歳

一月一六日 広島「憩いの家」を運営する文筆家田辺耕一郎の推薦から、バーバラ・レ

イノルズが提唱した「広島・長崎世界平和巡礼」の一員に選ばれる。

四月一六日 世界平和巡礼団（団長・松本卓夫静岡英和女学院院長＝元広島女学院長）の

四〇人が急行「安芸」で広島駅を出発。阿部は大学ノート表紙に「旅日記」と書き、「私の全力をつくし、世界の人々に原爆のおそろしさを語り、空しく苦しみ亡くなつた人達の平和への願いを代弁する決意である」と巡礼の日々を欠かさずつけ始める。

四月二一日 平和巡礼団が羽田空港からホノルルへ飛び立つ。

四月二二一日　（以下、現地時間）　ホノルル青年会議所で講演会。翌日ホノルルを出発し、ロサンゼルスへ。

四月二四日

松本らがテレビ人気番組「スチーブ・アレン・ショー」に出演。二六日には、リンディー・オペラ劇場で一般集会。入場料は一人二五<sup>ド</sup>ル、五〇〇人が以上が集まる。

四月二八日

団員がロサンゼルス空港に集合。北、中、南の三コースに分かれる。

四月三〇日  
松本、阿部、団員で同行取材の中国新聞社社会部次長満井晟らがカリフォルニア州都サクラメントを訪れ、副知事と面会。地元紙「サクラメント・ユニオン」が阿部の被爆体験を五月一日付で報じる。

五月三日

阿部ら南コースは、サンフランシスコからダラスを経てテキサス州に散らばり、四日夜ミズーリ州カンザスシティへ。

五月五日  
原爆投下時の大統領、ハリー・トルーマンがミズーリ州インディペンデン

スの記念図書館で団長の松本と会見。阿部、廿日市高教諭の森下弘、長崎のケースワーカー高原弘子ら七人と通訳の四人も立ち会う。元大統領トルーマンは「双方で五〇万人以上の死者を出さないよう戦争を終結させるのが目的だった」と投下の断を下した理由を述べた。阿部は「実のないあつけない面会なり」と「旅日記」に書き留める。

五月一〇日  
ミズーリ州セントルイスで市長招待の歓迎会が開かれ、阿部が約一五〇人の前で被爆体験を語る。

五月二八日  
世界平和巡礼団が首都ワシントン入り。団長の松本は、上下両院原子力合同委員会でパストーレ委員長らと会見。部分的核実験禁止条約締結への米国の努力をたたえ、原水爆禁止を要望。「原子力は人類の破滅の方向に使うのではなく、人類の繁栄のための平和利用に努力してほしい」。通訳一人を含む団員四二人の航空券団体割引が合致しないとする航空会社か

らのクレームで財政問題が表面化する。

六月四日

世界平和巡礼団がニューヨークに到着。

六月七日

英國ロンドンやベルギー・ブリュッセルの支援組織から招請があつた第一

陣二〇人がロンドンへ出発。

六月八日

ニューヨークのカーネギーホールで最終講演会を開き、歐州への第二陣となつた阿部は着物を着て会場へ。入場料は一ドル。コメデイアンのデイツク・グレゴリーも贊助講演し、聴衆一二〇〇人からの募金は五〇〇〇ドル（当時一八〇万円）が集まる。

六月一一日

阿部ら八人が国連にウ・タント事務総長を訪れ、原爆被爆の影響調査を要望。

六月一二日

残留組二〇人がニューヨークを出発。翌日フランス・パリに入る。

六月一六日

科学者グループが受け入れ、パリの大劇場シルク・ディベルに集まつた

聴衆に、阿部や広島市の幼稚園長大内洋ら五人が被爆者の立場から訴える。

六月一七日 ベルギー国王からブリュッセルに招かれた一〇人を除く一行は西ドイツへ。一八日ドイツ民主共和国の首都東ベルリンに入り、一九日には、ナチスが郊外に設けたザクセンハウゼン強制収容所を見学。阿部は「1人1人が1人1人の人間の手と心によつて殺された事実には心から怒りを感じる」と「旅日記」に書き残す。

六月二六日 巡礼団の一行四〇人が東ベルリンからの急行列車でモスクワに到着。二九日ゴーリキー中央公園での集会で広島女学院大教授の庄野直美ら四人が話す。

六月三〇日 モスクワからハバロフスクへ空路にて出発。

七月二一日 一行四〇人がナホトカから日ソ定期船「オルジヨニキーゼ号」に乗り込む。二等客室だったが一等客船食堂やロビーを使える便宜を受けた。

七月四日

横浜港に帰着。

七月五日

巡礼団の二一人が急行「安芸」で広島へ戻り、原爆慰靈碑に黙とうをささげる。翌六日は平和記念館での「市民への帰国報告集会」に臨む。団長の松本は計八カ国、約一五〇都市への巡礼は「平和のためのタネまきだった。今後はその成長と収穫を目指し、地に着いた運動を繰り広げなければならぬ」と訴え、阿部ら団員も各自の考えを発表。

八月五日

原水禁運動の分裂から社会党・総評系の広島・長崎・静岡原水爆被災三県連絡会議が広島県立体育館で開いた原水禁大会の開会総会で、広島県原水協代表委員森滝市郎の基調講演に続き、阿部による「被爆者の訴え」など三つの特別報告。

## 一九六八(昭和四三)年四一歳

原子爆弾被爆者に対する特別措置に関する法律(原爆特別措置法)が九月一日施行。

## 一九七〇（昭和四五）年 四三歳

海田町原爆被害者会が編さんした『原爆体験を語る』に「再び戦争があつてはならぬ」を寄稿。

## 一九七五（昭和五〇）年 四八歳

海田町原爆被害者会が編さんした『被爆三十年の歩み』に「第一回国会請願の思い出」を寄稿。

## 一九八〇（昭和五五）年 五三歳

世界平和巡礼実行委員長も務めた外科医原田東岷の執刀で、ひきつっていた右手は振つて歩けるまでになり、口のゆがみが楽になる。

## 一九八三（昭和五八）年 五六歳

原水禁の原水禁大会が八月四日、県立体育館で始まり、一一カ国五一人の代表を含む約八〇〇〇人が参加。阿部が「世界のどの国でも再び核の犠牲者を出してはならない」と訴える。

## 一九八五（昭和六〇）年 五八歳

三月二一日 全国規模の反核集会「<sup>5</sup>8年・平和のためのヒロシマ集会」が市内七会場で行われ、平和記念公園に集まつた約五〇〇〇人の聴衆を前に、阿部は「被爆者が生きていてよかつたと思える時は、援護法が制定され核兵器が廃絶された時」と訴える。

七月二九日 原爆被爆者の援護事業に功労のあつた人への厚生大臣表彰九二人が発表され、阿部や広島県被団協事務局長を前年に退いた桧垣らが選ばれる。

一〇月一九日 日本被団協の被爆者代表団がフランスへ出発。被爆者中央相談所理事長の肥田舜太郎を団長に阿部ら五人。核兵器廃棄の国際条約締結や政府首脳の被爆地訪問を求めたミッテラン大統領宛ての要請書を携える。

## 一九八六（昭和六一）年 五九歳

吉川清が安芸区の国立療養所畠賀病院で一月二十五日、七四歳で死去。葬儀には広島県被団

協理事長の森滝市郎ら約六〇人が参列。阿部は「原爆被害者の会をつくつたころは『戦争はいけん、原爆はいけん』と言うだけで“アカ”と呼ばれた。吉川さんはそんな声にひるむことなく、私らにとつて大きな励みだった」としのぶ。

### 一九八七(昭和六二)年 六〇歳

国連軍縮フェローシップでソ連、インドなど二〇カ国二〇人が広島市を訪れ、阿部ら被爆者二人が証言。

### 一九八八(昭和六三)年 六一歳

広島市の財團広島平和文化センターが一月に派遣した初の市民平和友好訪中団で中国を一週間訪れ、南京大学や上海の中学校で被爆体験を語る。

### 一九八九(平成元)年 六二歳

広島平和文化センターの「被爆体験講話講師」に四月から加わる。当時は一二人。第二回世界平和連帶都市市長会議が八月五日、平和記念公園の広島国際会議場で開かれ、代表者

ら約二〇〇人が被爆体験を聞く懇談会でも証言する。

## 一九九一（平成三）年 六四歳

第二回国連軍縮京都会議に参加した二五カ国の軍縮担当者らが平和文化センター事業部長の高橋昭博や阿部から被爆体験を聞く。夫三郎の病状から講話講師を退く。

## 一九九二（平成四）年 六五歳

阿部三郎が八月三〇日、七三歳で死去。

## 一九九五（平成七）年 六八歳

原爆医療法と原爆特別措置法を一本化した被爆者援護法が七月一日施行。海田町原爆被害者会の会長に就き、二〇〇七年の解散時まで続ける。

## 一九九七（平成九）年 七〇歳

日本被団協初代事務局長を担つた藤居平一（一九九六年に八〇歳で死去）の追想集『人間銘木』に「火の玉の救世主」と題した追悼文を寄稿。

## 一九九九(平成一一)年 七二歳

広島平和文化センターの「被爆体験証言者」を委嘱される。

## 二〇〇三(平成一五)年 七六歳

広島・長崎市の「広島・長崎講座」の呼びかけに応じた早稲田大の総合講座で講師を務める。

## 一〇〇四(平成一六)年 七七歳

広島・長崎市の「児童生徒平和のつどい」で被爆直後の惨状を語る。

## 一〇〇五(平成一七)年 七八歳

被爆体験を継承し平和活動の担い手を育成する市民対象の連続講座「ヒロシマ・ピース・フォーラム」で証言。

## 一〇〇九年(平成二一)年 八二歳

民族対立の内戦で荒廃したスリランカ東部の復興を担う行政官や記者ら九人に証言（三月）

二二一日）▽外務省が招き、原爆資料館見学を希望したアフリカ・ウガンダのサム・カハンバ・クテサ外相に証言。メモも取った外相は「医療で身体の傷は治療できても心の傷は治せない。被爆者が負った心の傷が何より印象に残った」と話す（六月六日）▽日本とイラクの外交関係樹立七〇周年を記念し外務省が招いた、バリ外相は阿部の体験を聞いて「軍拡競争が起きている中東にも、平和を求める人はたくさんいる」（六月二一〇日）

## 一〇一〇（平成二二）年 八三歳

トルコの駐日大使が原爆資料館を見学し、阿部が証言をする（一月三一日）▽東ティモールのジョゼ・ラモス・ホルタ大統領が原爆慰靈碑に献花し、阿部の証言を聞く（三月一九日）▽イタリア・ローマ市長と高校生一〇人が阿部の体験を聞く（四月一二日）▽エクアドルのラファエル・コレア大統領が資料館を見学。外国元首で初めて国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を訪れ、阿部の証言に耳を傾ける（九月七日）▽元イスラ大統領で国連総会議長のジョゼフ・ダイスに、日本政府の「非核特使」として阿部と長崎市の被爆者が証

言。「悲惨な体験をしたにもかかわらず、一人は広島、長崎を離れず証言を続いている。

平和への強いメッセージだ」と敬意を表す（一〇月二八日）

## 二〇一一（平成二三）年 八四歳

アフリカ北東部ジブチの在ジュネーブ国際機関代表部大使に証言（一月一七日）▽原爆資料館が観光客を案内するタクシードライバー、運転手やバスガイドを対象とする研修会の参加者五十三人に体験を語る（三月一〇日）▽南米ウルグアイの工業エネルギー鉱業相に証言。「被爆者が抱える苦しみに触ることができた」（九月九日）▽衆議院の招きで来日し広島訪問を希望した南アフリカ国民議会（下院）の議長に証言（一一月一三日）。

## 二〇一三（平成二五）年 八六歳

胃がんが見つかり、広島平和文化センターの「被爆体験証言者」を四月に退く。

## 二〇一六（平成二八）年 八九歳

広島県被団協の結成六〇周年記念式典で功労者として一月二七日表彰される。「年々仲間

が減つて切迫した気持ちです。せめて私が証言を続けたいけど、体がついてこなくて…。  
さまざまな地域の活動が運動の力の源です」

## 一〇一七(平成二十九)年 九〇歳

広島市南区の介護付き有料老人ホーム「広島八景園」へ入居。

## 一〇一四(令和六年)年 九七歳

「広島・長崎世界平和巡礼60周年記念パネル展」(NPO法人ワールド・フレンドシップ・センター主催)期間中の四月一三日、ギャラリートークに臨む。夏にかけて広島のみならず東京からのメディア取材に応じる。同センターが八月六日、中区で開いた講演会で被爆体験を海外の若者らにも証言。一〇月一一日、日本被団協がノーベル平和賞に選ばれたことを「八景園」自室で夕方見ていたNHKニュース番組で知る。

## あとがき

『被爆者 阿部静子は語る』は、ご本人の惜しみない証言と協力で成り立った。九七歳となつた母の体調に心を碎く息子・娘さんの理解もあつて半年間に及んだ聞き取りは可能となつた。あらためて感謝を申し上げたい。

本書の聞き取りは、「ヒロシマ通信」研究会（代表・宇吹暁元広島女学院大教授）メンバーの菊楽忍（元原爆資料館職員）、菊楽肇（元広島市職員）、西本雅実（元中国新聞社記者）が当たつた。

成立に至る経緯と意図をこの場を借りて説明する。

研究会は、宇吹が著した『原爆手記掲載図書・雑誌総目録 1945—1995』（三六七七冊の書誌情報を収録して一九九九年発行）を基に、それ以降も続いた「原爆手記」を含めて被爆七〇年の翌二〇一六年、「ヒロシマ通信」という書誌

データを検索できる専用サイトを設けた（<https://hiroshima-letters.net/>）。取り組みを続けて被爆七五年の「一〇一〇年末までの刊行は六一九四冊に上る」とをまとめ、各書誌情報を発信している。

「原爆手記」は、人間が原爆でどうなったのか、それがどのように記憶され、伝え受け止められたのかを知る記録であり「紙碑」もある。被爆者個人や被爆時に所属していた団体が発行元の私家版が多く、広島の公共図書館も所蔵していない書籍は珍しくない。菊楽忍は原爆資料館情報資料室でこれら手記の入手に務め、西本は原爆を巡る取材に長年携わり埋もれていた手記の掘り起こしにも当たってきた。

そうした中で、ヒロシマの歩みを知り未来をも考える上で欠かせない人物、阿部静子さんの半生をきちんと聞き取つた「原爆手記」がないことに気づいた。「八景園」におられるのを聞いたが、一〇一〇年一月に国内で確認され一気に広がつ

た新型コロナウイルス感染で訪ねることはかなわなかつた。

やきもきしながら時を過ぎすうち、聞き取りメンバーはいずれも六五歳となり、勤務先を離れた。同時に気ままな時間を手にして、資料収集などの準備を重ね、決まり事も多い老人ホームでの暮らしの空き時間に三人そろつて訪れた。

阿部さんの体力を考慮して「一回につき一時間くらいで済ませます」と申し入れていたが、ご本人の熱意から毎回二時間近くたつていた。「年には勝てません。ボケりますから」とおっしゃりながら、語られる話の豊かさ、記憶と言葉の力強さや鮮やかさにこちらが魅せられた。自省を込めて記すが、被爆者の体験を重んじるあまりなのか、記憶の改編を免れていない証言を裏付けもなく取り上げ「伝説」化しているのはメディアの取材者のみならず、継承しようとする人たちにも見られる。そうした定型化や惰性に陥らないようにと幾度も聞き返し、文献資料と照らした細かな質問にも向き合つてくださつた。

都合一四回を数えた証言の聞き取りは録音してすべて書き起こし、背景説明を加えて再構成した。それを阿部さんに見ていただき、本書とした。勘違いがあれば、編者らの責任であることは申すまでもない。

原爆資料館や中国新聞を含む提供写真や、地名略図を入れた本書のレイアウトは、丸岡清枝（広島都市学園大学非常勤講師）が当たつた。平和記念公園となつた旧中島本町の慰靈祭を嘗む「中島観音会」の会長だった福島和男さん（二〇一八年に八六歳で死去）の手記『平和公園の下に眠る幻の中島界隈』（二〇〇七年発行）や、朝鮮半島からの徴兵一期で広島へ送られて被爆した元韓国原爆被害者協会長の郭貴勲さん（二〇二二年に九八歳で死去）の手記『被爆者はどこにいても被爆者』（井下春子翻訳、二〇一五年発行）などに続いて手がけてくれた。

本書の刊行にあたつては、「被爆者阿部静子出版委員会」をつくり、公的助成を得た。

被爆八〇年となる二〇二五年、本書を手にとつていただき、原爆が人間に何をもたらしたのか、核兵器の拡散と戦禍が続く世界にあって、私たちは何ができるのかを考えるきっかけにもしてほしい。被爆者阿部静子と編者や協力いただいた関係者の切なる願いである。

（二〇二四年一二月二三日記）

## 編者略歴

菊樂忍

一九五八年三次市生まれ。九〇一二〇二四年広島平和記念資料館職員。同館情報資料室での各資料展を立案・担当。論文に「ヤン・レツル再考」など。

菊樂肇

一九五七年北海道帯広市生まれ。八一一一〇一八年広島市職員、一二三年市文化財団を退職。『図説戦後広島市史 街と暮らしの50年』などの編纂さんを担当。

西本雅実

一九五六六年広島市生まれ。八〇一一〇二一年中国新聞社記者。『検証ヒロシマ』『『広島の復興経験を生かすために』『広島市被爆70年史』などを執筆。

## 被爆者 阿部静子は語る

—悲しみに苦しみに 生きていてよかつた

著 者 阿部静子+「ヒロシマ通信」研究会

発 行 二〇一四年一二月三一日

発行所 「ヒロシマ通信」研究会

Eメール hifukushisho@gmail.com